

334

215



始



384  
275

愛山 山路彌吉著

# 乃木大將

東京 民友社 發行

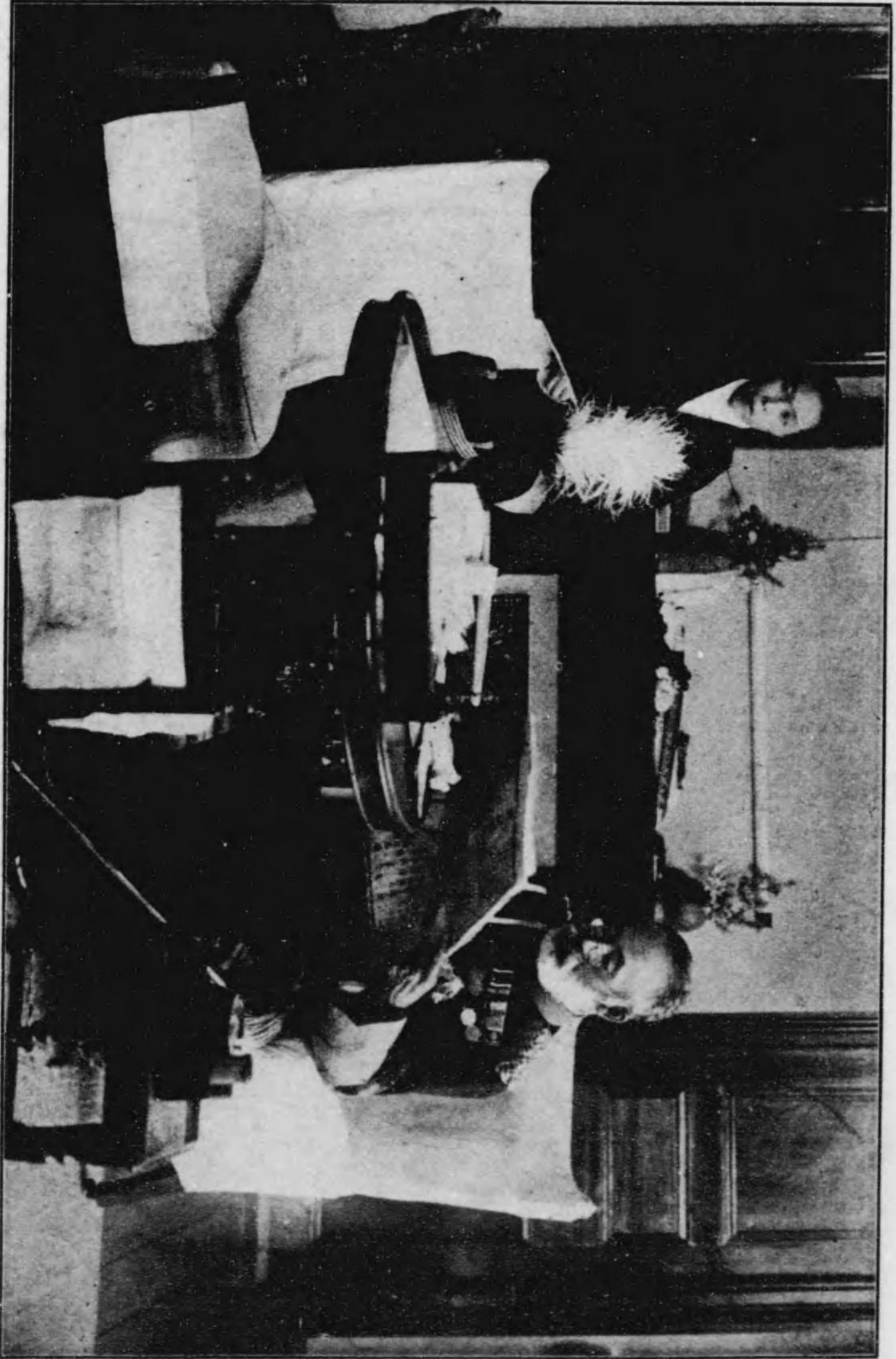
73

334-215



乃  
木  
大  
將

大正  
1.10.19.  
丙寅



子 静 人 夫 と 将 大 木 乃 の 影 撮 念 記 日 當 死 殉  
影 撮 る け 於 に 室 居 の 邸 自 將 大 乃 町 坂 新 坂 赤 分 十 五 時 九 前 午 日 三 十 月 九 年 元 正 大 日 一



將大木乃の影撮念記日當死殉

あ興贈りよ皇英回今てしにのしるたれらせ影撮て於に邸自將大日當死殉た赤れ是  
功章勳鵞金は下、章花桐日旭は上個二邊右)央中間胸をスツバ章勳大るたれらせら  
し可る知を意の念記るす對に代名御國英てしと員伴接其はるたれらせ挂に(級一



子静人夫將大木乃の影撮念記日當死殉  
裝服の人夫りなのもるたれらせ影撮に別外の眞寫掲前た亦も是  
りなるた念記の終最人夫てしにのもの儘の其服喪の禮拜宮墳は



典勝木乃

典保木乃



影攝の念記征出役戦露日、日二月一年七卅治明



子部人夫將大木乃  
影攝節元紀年六卅治明



堂母將大木乃

乃 木 大 將



明治十四年九月十四日撮影



明治二十四年一月五日撮影



明治三十四年九月十八日撮影



明治三十三年三月六日撮影



乃 木 大 將



日露戰役當時の撮影

きみたきにものみち  
くされはてやえ  
いかにみんまかひの世の中  
微奉義不亭也

明治四十五年七月二十日松陰先生後嗣吉田康三氏を  
訪ひて贈りたる狂歌



臺灣總督當時の撮影



日清戰役當時の撮影

魚我所欲也熊掌亦我所欲也二者不可得兼舍魚  
而取熊掌者也生亦我所欲也義亦我所欲也二者不可  
得兼舍生而取義者也生亦我所欲所欲有甚於生者  
故不為苟得也死亦我所惡所惡有甚於死者故志  
有所不辟也如使人之所欲莫甚於生則凡可以得生者  
何不用也使人之所惡莫甚於死者則凡可以辟患者  
何不為也

齊

己酉秋日

典書

將大兩鄉東木乃  
作合士名諸外



藏家爵伯浦松 京東

筆將大木乃



藏氏耶次銳野雪 濱横

東京  
乃木陸大將

河國沼津用邸  
石井崇習院整敷

あふ

各殿下口御給状

の御後々々

事自下事上々

中止あり候旨思

皇位陛下事

世々御事

致し有様

同旨申上

一指不仕候様

至所存候

一月廿日

石井崇習

乃木陸大將の書簡 東京小畑山悦之助氏藏

石井崇習

河國沼津用邸

石井崇習院整敷

の御後々々

事自下事上々

中止あり候旨思

皇位陛下事

世々御事

致し有様

同旨申上

一指不仕候様

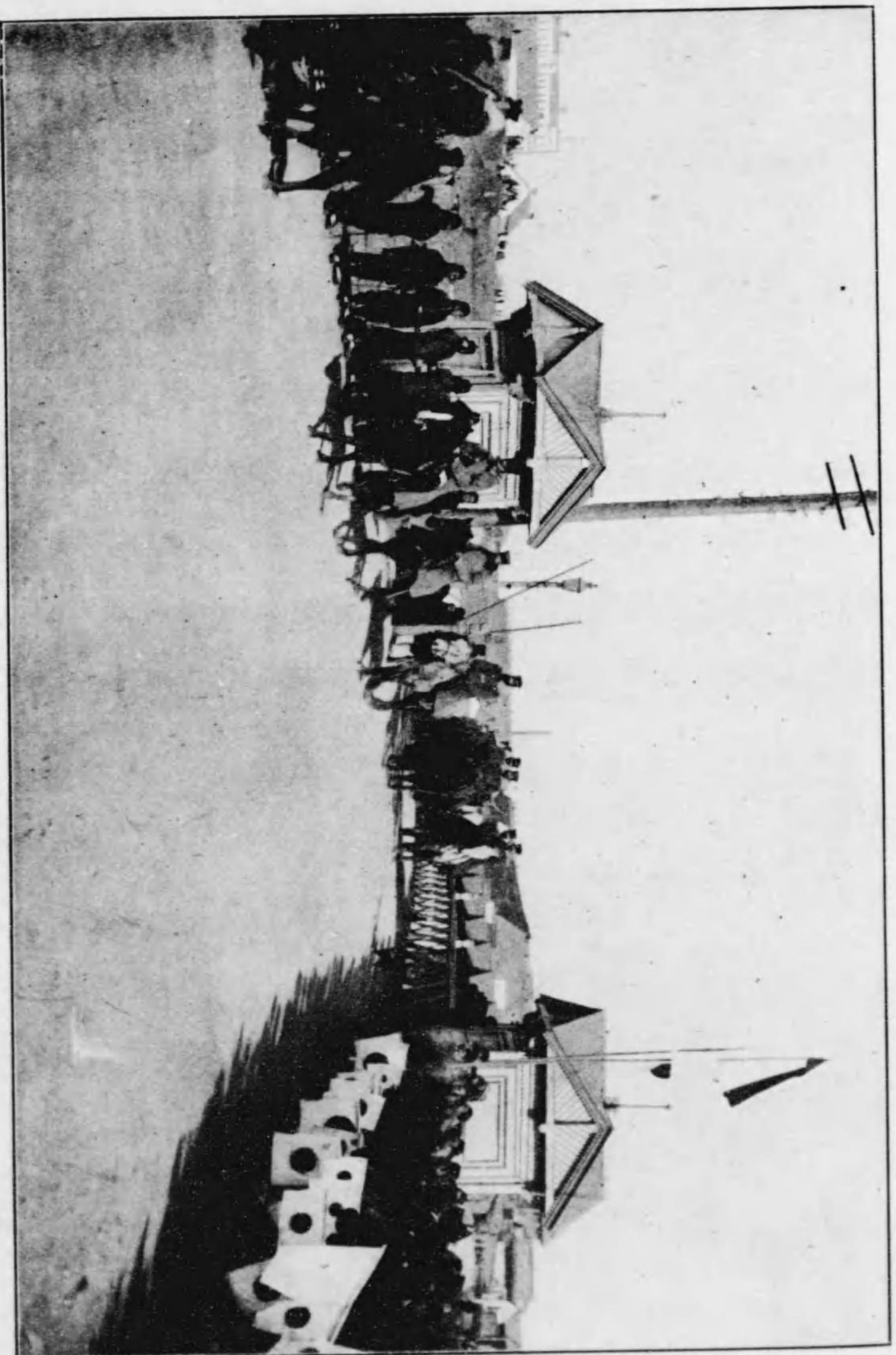
至所存候

一月廿日

石井崇習

乃木陸大將の子の書簡 東京福原道子氏藏





乃木大将の旅順入城 明治三十一年一月三日



(端左)將大木乃と(央中)帝皇逸獨



(二りよ右列中)軍將ルセッテスと(三りよ右列中)將大木乃るけに塞要順旗



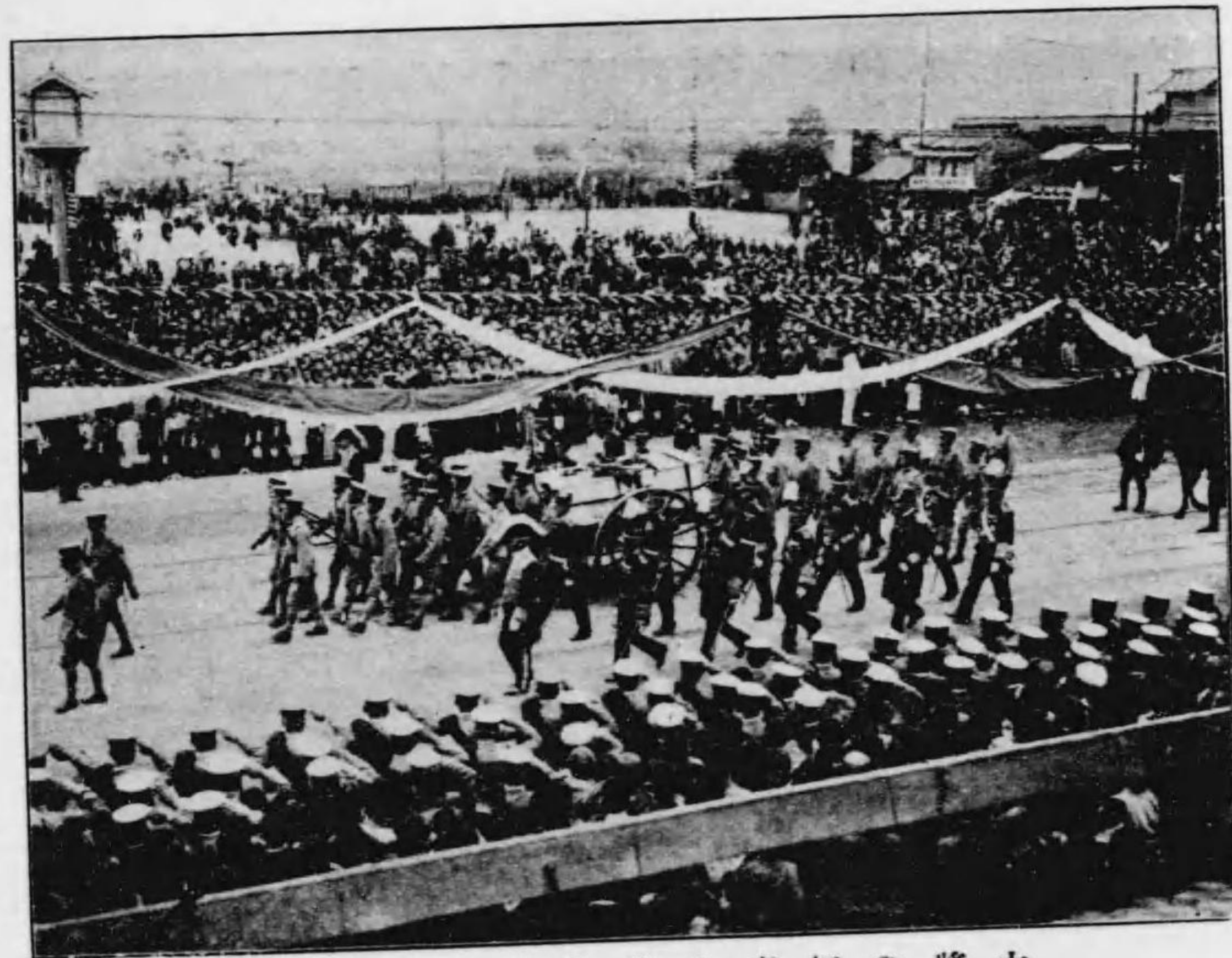
大元山の乃木大将 訪問の死翌日



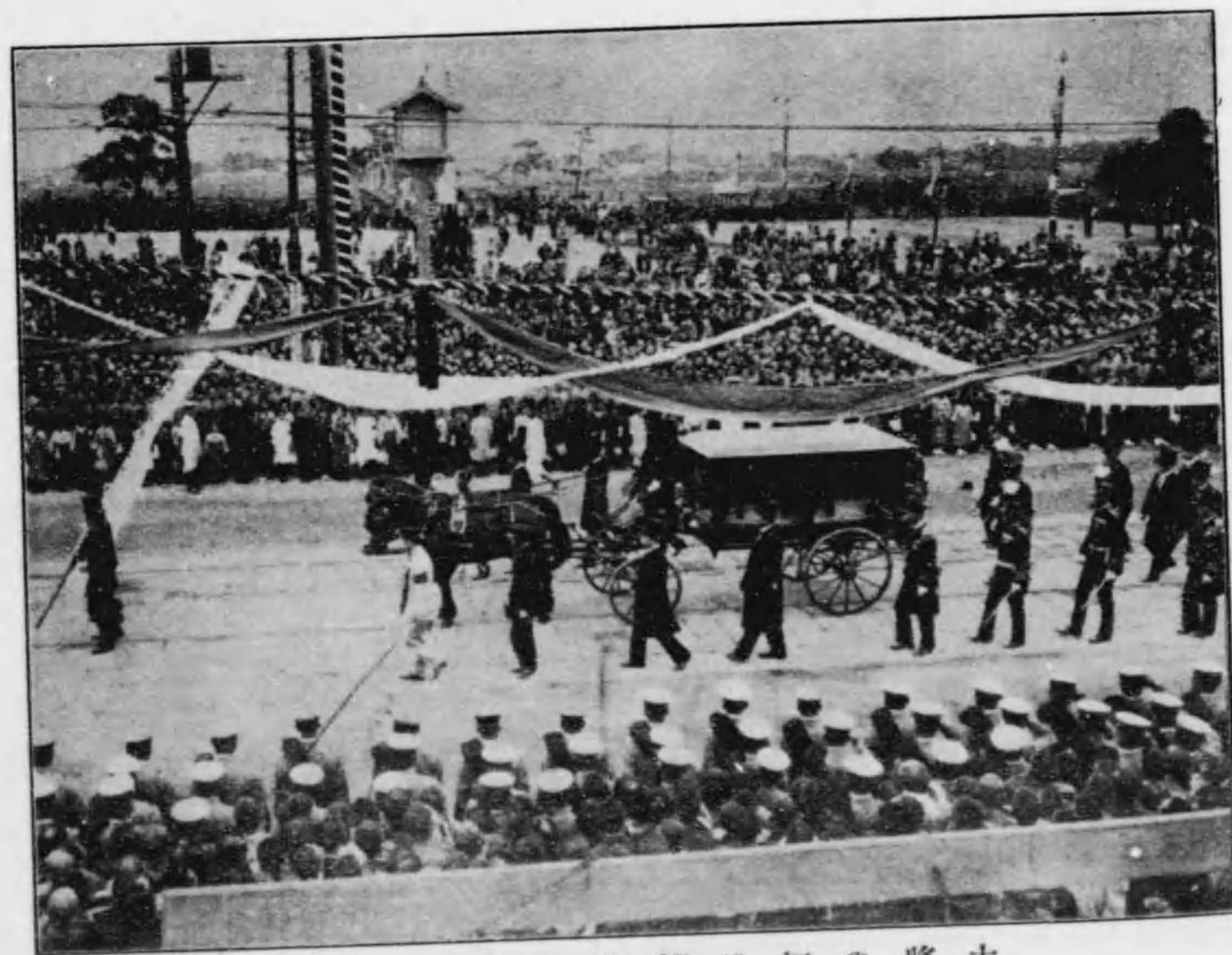
乃木大将の洋館



乃木大将葬儀其一

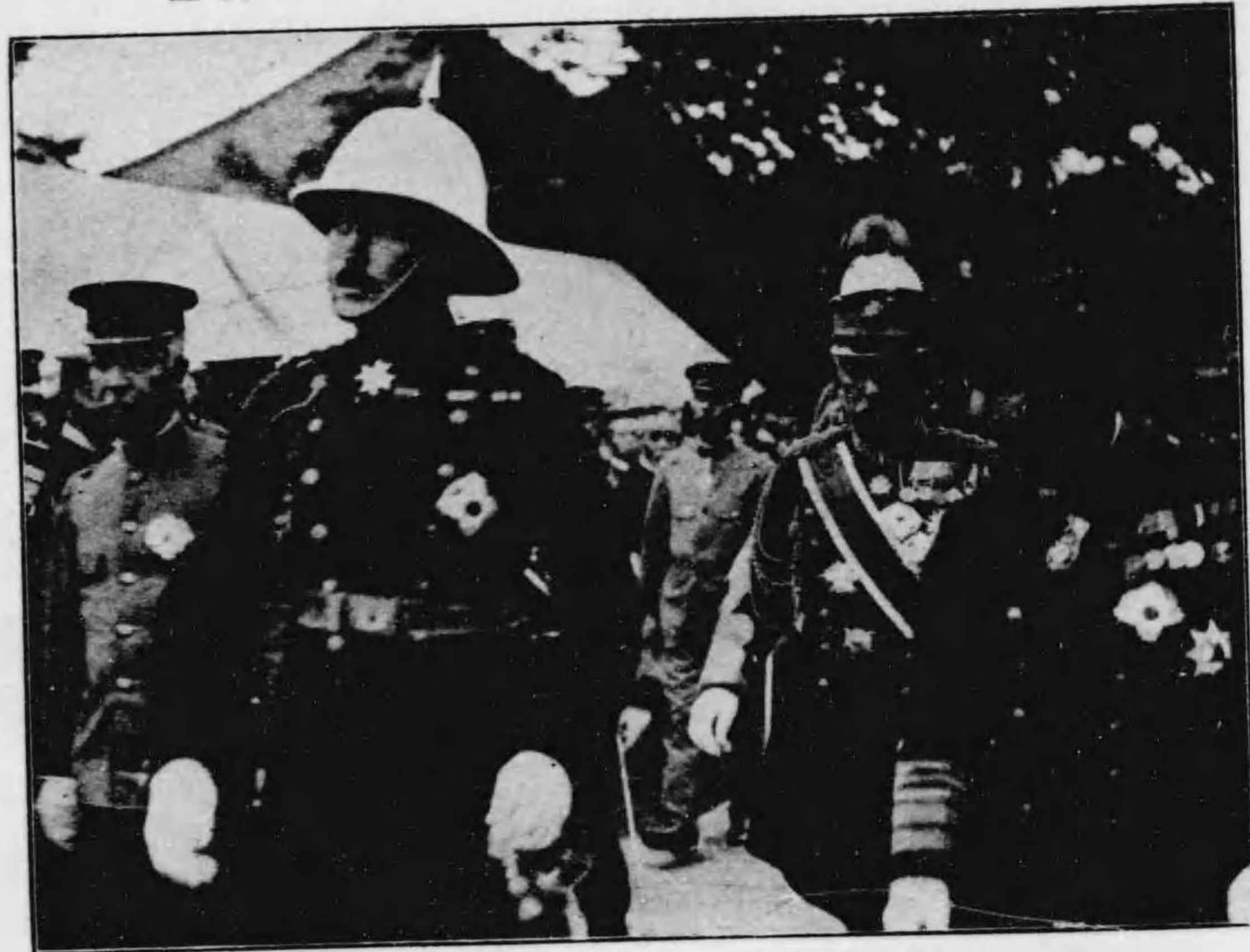


乃木大将の柩を青山葬場前を過ぐ



乃木大将の柩に引ける人夫の柩

乃木大将葬儀其三



御會葬のノソト殿下  
左より伏見大将、ノソト殿下、大島大将、東郷大将



ルボ中將夫人



青山に在る乃木大将夫妻の墳墓(左)  
と乃木兄弟の墳墓(右)

本後百身ノ御後七  
考乃ふの静子形分  
次中出古徳王殿ノ  
其他ノ考或徳王任七  
中々  
才立以下賜品(給下ヨリ)  
考紋付ノ御品考志  
考互ノ徳王ノ御院  
考附ノ御品考松井  
猪石高氏ノ御品

大正元年九月十二日  
湯地定基殿  
大徳寺作友  
玉末二之友  
静子之友  
弟典  
属

遺言條

第一 自公出陣時跡

追々奉り有救候

事又先其其如

少難有出陣事

以迄十年に後於

軍隊に失其其

死事得分心掛

其時

皇國の存亡に決するに

己分の口儀出候

處に先其其其後

三年の時も其時

己分の口大慶候

事又先其其其

修其其其其

第二 有與我死に後を

先其其其其

其其其其其

其其其其其

其其其其其

特々其其其其

其其其其其

其其其其其

其其其其其

其其其其其

其其其其其

第六 其其其其其

其其其其其

其其其其其

其其其其其

其其其其其

第七 父君其其其其

其其其其其

其其其其其

其其其其其

其其其其其

其其其其其

其其其其其

第八 其其其其其

其其其其其

其其其其其

其其其其其

第九 其其其其其

其其其其其

其其其其其

其其其其其

其其其其其

其其其其其

其其其其其

其其其其其

第十 其其其其其

其其其其其

其其其其其

繁華の古来の風俗

特、華族の優遇

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

才三才の材を其の材と云ふ

其の居るべき所

其の居るべき所

高麗物分記、其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

才立以下賜品(各級下ヨリ)

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

在る事作之儀

中世の家を住居と云

其の居るべき所

其の居るべき所

才十以下方死骸、其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

其の居るべき所

湯池定基殿

大飯事作殿

玉木二之殿

其の居るべき所

うつ志を

臣希典上

神きりま

大君也

みあゝ志たし

我はゆく  
あり

希典家  
静子上

出てまゝにて

あつらひまするの

なすときく

くらの湯者に

造ふそめは



乃木大將ヨリ石黒男爵ニ宛テタル遺言書

乃木大將  
石黒男爵  
ヨリ

方々

是日他借欲其こ  
<sub>かき付</sub> 存し海に送り  
<sub>て</sub> 此の多限しる事  
<sub>あり</sub> 骨子以信申上り  
<sub>たり</sub> 生有申候こと  
<sub>也</sub> 不致其難曾有  
<sub>り</sub> 医学上何カ  
<sub>も</sub> 不致其難曾有  
<sub>り</sub> 本乃何とて  
<sub>たり</sub> 頼こして  
<sub>たり</sub> 其の遺言  
<sub>たり</sub> 納得成に  
<sub>たり</sub> 以信申上り  
<sub>たり</sub> 後記書  
<sub>たり</sub> 抄

あり

名典

石黒行

子

乃木伯夫妻自殺の事は著者の心に甚大の刺撃を與へたれば、  
豚兒等に大將の事迹を語り聞かさんと思ひ、彼等の記憶し  
易き様に韻文につゞり、題して乃木大將と云ふ。昔し琵琶  
法師の平家を語りしやうに、彼等に口ずさみ易からしめ、  
自然に其高風清節を銘記せしめん爲なり。民友社の友人予  
に勸めて其注釋を造り、其歌と併せて之を世に公にせしむ。  
讀む人若し是を以て大將の爲には未見の友人にして、しか  
も學問の流儀の全く異なりたる一書生の、飾らざる、偽ら  
ざる心を以て作りたる一篇の哀歌なりと見ば可なり。

大正元年九月

愛山生

## 乃木大將 目次

- (一) 我等をして乃木大將を歌はしめよ……………一
- (二) 乃木氏の祖先の事……………二
- (三) 長州男兒……………五
- (四) 乃木十郎希次の事……………八
- (五) 馬關の攘夷、乃木十郎盡力の事……………一二
- (六) 乃木希典、庭訓に依りて勇士となる事……………一七
- (七) 乃木希典、玉木文之進に學ぶ事……………一九
- (八) 乃木希典、明倫館に入塾す……………二七
- (九) 長州四境戦争、希典小倉表出陣の事……………三二
- (一〇) 希典、伏見の兵營に入りて佛式の操練を學ぶ事……………三八
- (一一) 乃木希典、大義親を滅す事……………四八

(一一) 西南戦争、希典武功の事.....五九

- 一、希典、植木の戦に聯隊旗を失ひし事.....六一
- 二、希典、聯隊旗を失ひしを以て一生の恥辱と感じ居たる事.....七七
- 三、希典、木の葉に激戦の事.....八二
- 四、希典、銃剣を負ひ久留米病院に入院の事.....八九
- 五、希典、久留米病院脱走の事.....九三
- 六、希典、熊本城入城の事、熊本鎮臺参謀となる事.....九八

(一二) 希典、湯地氏を娶る事、獨逸に遊學する事、豊橋

旅團長を辭したる事.....一〇五

- ▲青年士官たりし時代の希典の行儀の事.....一〇六
- ▲希典、湯地氏を娶る事.....一〇七
- ▲希典、獨逸に遊學の事.....一一一
- ▲希典、豊橋旅團長たりしとき辭職の事.....一一二

(一四) 日清戦役、希典滿洲に出征の事.....一二五

一、希典、滿洲に出陣の事.....一二七

二、希典、強敵に逢はざりし事、并に大連灣容易に日軍の手に歸したる事.....一二〇

三、旅順陥落の事.....一二四

四、希典蓋平城に武名を掲ぐる事.....一三〇

(一五) 遼東還附、希典臺灣出陣の事.....一三二

五、希典、太平山に戦ひしより、金州方面守備隊司令官たりし事.....一三七

六、希典、臺灣出陣の事.....一四一

(一六) 希典、臺灣總督となる事.....一四六

(一七) 希典、丸龜の師團長となりたる事、及び石林村閑居の事.....一五三

▲希典、第十一師團長となる事.....一五六

▲希典、休職となる事.....一五八

(一八) 希典、旅順出征の事.....一五九

- ▲ 石林村に希典閑居の事……………一六一
- ▲ 日露戦役、希典出陣の事情……………一六四
- ▲ 勝典、保典兄弟出陣の事……………一七四

(一九)

旅順陥落の事……………

- ……………一七六

- ▲ 旅順の戦、勝典保典戦死の事……………一九〇
- ▲ 希典の詩にて二百三高地を爾靈山と名づくる事……………二〇〇
- ▲ 希典陣中の振舞の事……………二〇一
- ▲ 旅順陥落、希典ステッセル會見の事……………二〇三
- ▲ 旅順戦争の希典に與へし感懐如何……………二〇五
- ▲ 旅順の戦争中希典の妻の振舞の事……………二〇八

(二〇)

希典凱旋、學習院院長となる事……………

- ……………二一〇

- ▲ 希典、奉天の戦に加はる事……………二二四
- ▲ 希典陣中振舞の事……………二二五
- ▲ 希典凱陣の事、郷里に立寄る事、希典の妻の健氣なりし事……………二二九

(二一)

希典自殺の事……………

- ……………二六一

- ▲ 希典、乃木家絶家の覺悟の事……………二三一
- ▲ 希典、戦死者の父老を慰むる事……………二三四
- ▲ 希典、數ば廢病院を見舞ひたる事……………二三七
- ▲ 希典が學風の事、素行會の會員となる事、並に吉田松陰、山鹿素行崇敬の事……………二三八
- ▲ 希典、學習院院長となる事……………二五二
- ▲ 學習院長としての乃木希典(一)……………二五四
- ▲ 學習院長としての乃木希典(二)……………二五六
- ▲ 學習院長としての乃木希典(三)……………二五九
- ▲ 希典、伯爵となる事……………二六一
- ▲ 希典夫妻滿洲に赴く事……………二六九
- ▲ 希典、東郷と共に東伏見宮殿下に隨行して英國に赴きし事……………二七三
- ▲ 明治天皇崩御、希典殉死の事……………二七三

補遺

- ▲乃木家の氏神の事……………二七七
- ▲祖先の墓の事……………二七八
- ▲又一説……………二八〇
- ▲乃木十郎の事……………二八一
- ▲義士の墓に参詣の事……………二八一
- ▲長府に於ける乃木家の生活の事……………二八二
- ▲集童館の事……………二八六
- ▲玉木の塾にて學問する事……………二八八
- ▲希典、一旦歸藩の事……………二九二
- ▲前原騒動の前、玉木正誼、希典を誘ふ事……………二九三
- ▲又一説……………二九四
- ▲日本刀と洋刀とにつき希典父子異見の事……………二九五
- ▲希典、久留米病院脱走の事……………二九六

- ▲希典、大佐昇進祝の事……………二九七
- ▲日清戦役の時希典清人の捕虜を優遇したる事……………二九七
- ▲蓋平の戦……………二九八
- ▲模範師團長の時代……………二九九
- ▲希典、滿洲陣の事……………三〇一
- ▲日露戦役凱旋後長府に歸りし事……………三〇四
- ▲凱旋の時、決別の趣奏上したりとの一説……………三〇五
- ▲恩賜の金を散じ盡くす事……………三〇六
- ▲學習院長時代の事……………三〇七
- ▲大館集作の事……………三一二
- ▲希典の名の事……………三一四
- ▲渡邊石童丸の事……………三一四
- ▲希典前に死に、内室之に殉したりとの説……………三一六
- ▲希典の遺書の事……………三一八
- ▲祭料を賜はりし事……………三二五

▲希典夫婦葬儀の事……………三二六

▲碑銘の事……………三三三

▲希典、僕婢にやさしかりし事……………三三三

▲希典の生活の質粗なりし事……………三三四

▲希典、年金廢止論を唱へし事……………三三四

▲希典、商人を嫌ひし事……………三三五

乃木大將 目次終

乃木大將

山路愛山著



(一) 我等をして乃木大將を歌はしめよ

うつし世を	神さりましたし	すめらぎの
みあと慕ひて	我と我が	生命を棄てし
英雄の	徳をたふふる	人ありて
歌ひけらくは	我はしも	詩人に非ず
敷島の	大和の歌の	道にこそ



うとしといへど  
迫り来て  
掩ひ兼ねたる  
ならなくと  
許す人もぞ  
思ひ草  
いざや聞けかし

あはれ今  
いはねば苦し  
眞情を  
思ふ心の  
ありぬべき。  
しける言の葉  
同胞よ。

百感胸に  
自ら  
歌ふも罪と  
わりなきを  
此につらぬる  
茂くとも

(二) 乃木氏の祖先の事

出雲の國の  
乃木と云ふ

片ほとり  
里のありけり。

八束郡に  
其里に

古き塚あり、  
佐々木氏、  
なき跡なりと  
傳へ來し  
夏は茂れる  
埋もれて  
此所を苗字の  
其中に  
豪傑ありて  
乃木の村。

其塚は  
名は高綱と  
昔より  
口の碑  
蓬生や  
世に知る人も  
地となせし  
名を揚げ家を  
此頃は

國の守護なる  
云ふ人の  
里の老翁の  
古りしかど  
冬は落葉に  
なかりしに  
佐々木の黨の  
起したる  
詩人も歌ふ

乃木希典は宇多天皇の皇子敦實親王より出づ。親王の子雅信、源姓を賜ひ

始めて人臣に列す。其孫兵庫助成頼近江國佐々木の莊に居る。是れ近江源氏佐々木氏の祖なり。乃木氏は則ち佐々木の黨にして始め下野國都賀郡野木郷に居り、それより出雲國乃木に徙り住みたるものなりと云ふ。  
乃木村は出雲國八束郡に在り。昔は意宇郡に屬せしが、明治以後郡併合の時意宇郡は他の二郡に合して八束郡となれり。此村に古き塚あり。土人は當國の守護佐々木高綱の墓なりと云ひ傳ふ。高綱の墓と云ふは受けられぬ説なれども、佐々木黨乃木氏の此に住みしことは明かなり。佐々木黨の山陰道に雄視したること由來甚だ舊し。戰國時代には尼子氏ありて周防の大内氏と中國の覇を争ひ、大内氏亡びて後も數ば毛利氏を惱まし、永祿七年富田落城に至りて始めて其根據を覆へされたり。乃木氏の祖先も恐らくは其世には毛利氏の爲に被征服者の悲しき位置に落されたるものなるべし。乃木希典二十六歳、陸軍少佐たりし昔、下野國都賀郡野木神社に參詣し、家記に依れば自分先祖は此村より出でたるやうに思はるゝ故、取調べあり

たしと同社神職に依頼したりと云へり。希典は又出雲國の乃木村を夫妻にて訪ひ祖先の跡を弔ひしことあり。

(三) 長州男兒

美しき哉  
自ら  
聖者の  
眞なりけり。  
山陽の  
丈夫兒多し  
唱へつゝ  
仁の里、  
人を化すると  
言ひし  
天下る  
西のはてなる  
近き世に  
其赤き血を  
里の風儀は  
古の  
言こそ  
鄙にはあれど  
長門には  
尊攘の義を  
國の爲め

そゝぎ盡して

數多き

麻の中なる

白絲を

長門男兒の

人と爲り。

悔いざりし

中に育ちし

蓬とも

染むる色香は

自ら

壯士烈士の

みどり兒は

言ふべかりけり。

里の風

世に殊なれる

乃木希典は毛利家支藩長府毛利氏の士乃木十郎希次の第三子なり。嘉永二年十一月を以て江戸麻布日ヶ窪の藩邸に生る。安政元年希典七歳の時、吉田松陰海外に脱出せんことを計りて遂げず、安政六年希典十一歳の時松陰、井伊大老の爲に斬らる。萬延元年希典十二歳にして櫻田の變あり、翌年頃より本家萩の毛利氏始めて官武周旋に従事し、永井雅樂開國進取の説を持し専ら公武一致に奔走す、松陰門下の有志輩を始として防長二州の壯士永

井の微温なる調和策を喜ばず、朝議も亦攘夷に傾きしかば雅樂遂に士道に依りて自殺を命せられ、長州藩論一變して攘夷の先鋒となり文久三年馬關に於て外船を砲撃す。是れ實に希典十五歳の時なり。此時代に於る防長二州の士氣は誠に盛なるものにて英雄豪傑雲の如くなりしと云ふも可なり。但防長二州が斯く人才の淵藪たるには仔細あるとなれども此には述へず。但し斯様なる士風の間には育ちたる少年が自ら周囲の感化を蒙りて異彩を放つ人とならざるを得ざるは勿論の事なり。希典の父は長府藩の江戸詰の士にて希典も江戸に生れ十歳頃迄は江戸に在りたる様子なれども其後に長府に移住したり。其臘の如き柔らかき少年の脳髓に長門男兒の颯爽たる英姿が深き印象を興しは疑ふべからず。孔子が里は仁を美となすと云しは郷里の美風仁義の人を造るを言ふ也。希典の後に至りて日本の名將たりしもの故ありと謂つべし。

(四) 乃木十郎希次の事

雄劔鈍り  
夢さめず  
鼠になりし  
水無月の  
軍の船が  
寄來つゝ  
石火矢の音  
恐ろしかりし  
驚かず

壯士老い  
虎に均しき  
世の末や  
三日と云ふにぞ  
浦安の  
天地轟く  
すさましく  
有様を  
豫てより世は

泰平無事の  
武士の  
嘉永六年  
亞米利加の  
此の日の本に  
一道の  
人の眠を覺しける  
敢て騒かず  
かくこそと

覺悟したりし  
是は是れ  
毛利氏にぞ  
希次と  
其頃の世に  
儒醫なりし。  
身は長袖に  
こゝろさし  
思ひまうけし

英雄の  
長門の國の  
仕へける  
云ふものなりき  
腰拔と  
されど武門の  
似たれども  
皇國の爲に  
ことなりき。

一人は誰ぞ  
長府なる  
乃木の十郎  
希次は  
あざけられける  
末なれば  
烈しかりける  
死なんとは

乃木氏は醫と儒を以て長府侯毛利氏に仕へ百石を食みたる江戸定府の士なりき。されば希次も江戸の藩邸に生れたり。希次の父を十郎希次と云ふ。

希典の母は常陸土浦土屋侯の藩士長谷川某の女なり。十郎希次は儒醫の家に生れたれば文學は家業にしてその造詣固より深かりしかども、かゝる業家に似合はず、好んで兵家の書を読み、自身も武藝に勝れ、弓術も上手にて京都の三十三間堂に通し矢を試みたる程なり。されば元龜天正の戦史、甲越二氏の軍略などにも深く心を用ゐたりと云ふ。是は花見る人の長刀とやらん云ふやうなることにて家業に似合はざる醉興とも云ふべけれども、其時代の武士社會は専門家に智識なく門外漢に學問あり、上に人才なく、下に豪傑の潛みし末世なりしかば高貴の武職を襲ぎし門閥には懦弱無智の貴人多く下士若くは儒者、醫者などに却つて武道を研くものもありしなり。乃木十郎も其一人にて外交の事次第に切迫し來りし世には武技、兵學こそ大切なりと心得しかば、さる筋に専ら心掛けたるものと思はる。されば嘉永六年六月米國水師提督ペルリの渡來したりし時も十郎は江戸に在りて世人の遽に騒ぎ立つを見、窃に我は始よりかゝることもありぬべしと覺悟し

たれば兵書も讀み、武技も講じたるなり、今さら驚くとかはとて心中多少の満足を感じたることならん。かゝる人なりしかば武邊の吟味嚴重にしてすこしなりとも刀を錆びさする人などあれば其不心得を責めて絶交したることもあり、長府に移住の後も或時は麥畑の中に身を蔽ふものもなくて一夜を明かし、我身體の果して之に堪へ得るや否やを試みたることもあり。或は屋敷の周圍を歩きまはり五晝夜にして始めて疲勞を感じ打倒れければ、さらば君命ならんにはそれ程は休まず憩はずして働き得べしと覺りたりなどいふ云ふなり。天下の勢將に變せんとする時は英雄兒先づ之を知る。乃木十郎は時勢の赴く所を知り時勢に率先したるものなり。希典はかゝる人の子なり。誠に此父にして此子ありと謂ふべし。

希典十一歳の時、父の十郎藩侯に諫言し、諺を蒙りて藩地に追下され誠祿閉門を命ぜらる。十郎則ち妻子を伴ひて長府に著し町の片ほとりに三百坪ばかりの地を購ひ、其一隅に在りし古き足輕長屋を其儘住宅としたり。此

家は六疊、三疊、二疊、各一間總計三間十餘疊に過ぎざる隘屋なりしかども十郎は一向頓著せずして住み居たり。其頃の乃木家の生計は至て窮し疊は破れ、屋根は漏り、常人の住むに堪へざりし程なれども武具のみは立派に飾り、弓、矢、刀、槍等の武器を所せきまで並べありき。かくて藩議の解くるまでは乃木家は往々衣食の資にさへ乏しきことありしかば、希典は幼年ながら色々苦勞したることもありけるとぞ。

(五) 馬關の攘夷、乃木十郎盡力の事

現人神の

しろしめす

瑞穂の國は

昔より

國の礎

かたくして

揺がざりけり。

夷等は

皇の御威稜を

かしこみて

まつろひにけり。

さればこそ

昔し蒙古の  
かけ廻り  
なしと言ひける  
秋かによ  
はやちの中に  
すさまじく  
世界のはても  
強國の  
海のもくずと  
三人と  
ありけるならし。

荒れ出て、  
馬蹄の下に  
其世にも  
筑紫の海の  
武士の  
風雨と共に  
靡かぬは  
十萬の兵  
なり果て、  
青史に記せし  
此國は

東に西に  
青草の  
弘安四年の  
浪あれし  
劍の光  
戦ひて、  
無しと誇りし  
悉く  
生きて還るは  
勳業も  
國は小さく

人強し。  
悔るものゝ  
世の末や  
國の威嚴を  
つたなさを  
矢竹心の  
夏五月  
より來し船を  
砲聲は  
勅を奉じて  
功勳とて

獨立自尊、  
無かりしを  
幕府の有司  
守り得ず  
憤りける  
現はれて  
赤間關の  
目掛けつゝ  
是ぞ攘夷の  
たじろがぬ  
六十餘州

二千年、  
文恬武熙の  
膽なくて  
人を恐るゝ  
武士の  
文久三年  
夜の波  
打かけたりし  
魁と  
長門男兒の  
どよめきて

ほめたゝへけり。  
希次は、  
國に死なんの  
見えにける。

さる程に  
時來れりと  
志

乃木の十郎  
喜びて  
たのもしくこそ

乃木十郎は一旦譴責を蒙りて日蔭の身となりしかど攘夷論の盛んなりし文  
久二三年頃は藩譴も解けたれば再び世に出でたり。此頃防長二州は尊皇攘  
夷の中心と言はれし程にて毛利の本家は天朝の御覺もめでたく文久三年京  
都より攘夷の期限を其年五月十日と仰出されしも専ら長州藩の周旋に依れ  
りとぞ。されば本家と同功一體なるべき長府藩に於ても固より異議あるべ  
きに非ず。其期日の夜に當り馬關に於て本家の軍艦二隻に陸兵を以て助力  
し、折しも東方より來りて府中港に碇泊したる外船に向て發砲したりしを  
以て外船も應戦したれども竟に撃退したり。是れぞ日本國に於て勅命を奉

一六  
じて攘夷の魁をなしたるものなりしかば、兼て徳川幕府の外國に對する政  
策の卑屈柔弱なるを憤りたる諸藩の志士は長州を以て神州正氣の集る所と  
して之を喝采したり。乃木希次は武道の心掛深き人にて固より赤熱なる攘  
夷論者の一人なりしかば是れ正に志士身を國に獻ぐるの秋なりとて奔走盡  
力到らざる所なかりき。五月十日の夜撃たるは米國商船ペンブローク號な  
り。それより五月二十三日佛國汽船キャンション號を撃ち、同二十六日和  
蘭軍艦メシツザ號を撃ち、六月一日米國軍艦ヴァイミング號を撃つ。此米艦  
は戰鬪準備ありしかば毛利本家の軍艦壬申丸、庚申丸撃破せられて沈没す。  
同六月五日佛國軍艦セミラス、タンクレード二艦を撃つ、二艦は固より戰  
を期して來りしことなれば彼より逆まに陸上に砲撃し、長州方頗る苦戰に  
陥り、敗北したりしかば二艦より兵士を上陸せしめ追撃せしがやがて引取  
りたり。是にて戰爭は前後五回ありしなり。此頃の事なりしか、若くは明  
年八月四國軍艦來襲の時なりしか時日は定かならねども乃木十郎は味方の

敗軍を聞き大に憤り、手槍を提げて長府の町はづれに出で武士既に戰場に  
臨む上は固より命を棄つる覺悟あるべきなり。されば敗軍の上は死にて君  
國に報ゆべき筈なるに萬一見苦しくも敗走して此處まで逃れ來るほどの臆  
病者あらんには希次立どころに突き殺すべしとて四方を睨んで立たるさま  
のすざましかりしとは其世を忘れぬ父老の物語なり。

(六) 乃木希典庭訓に依りて勇士となること

此父にして	此子あり	庭の訓の
きびしくて	武道の吟味	強ければ
心やさしき	若者も	たけき猛者とは
なりにけり。		

乃木十郎はかくの如き人なりしかば希典の幼年も頗る嚴格なる庭訓を受け



たりと見ゆ。たとへば或年の冬の事なりき。希典、今日は寒しと云ひしを、十郎聞きて汝寒くば着物を着せ取らせんとて其儘希典を裸體にし氷ばかりの冷水をその頭上に打かけしとぞ。其秋霜烈日にも比すべきスバルタ風の訓練もて子弟を御せしと思ふに堪へたり。此人、藩の世子(毛利元敏)の傳役となり、世子が明倫館に學ぶ爲に萩に行きし時、隨行し、世子、毛利本家の主、敬親に謁し食事したりし折、飯粒の落ち散りしを、若殿御聞き候へ、米穀は農民の終日炎天に立ち夏畦につかれ耕作して造り出したるものにて誠に粒々辛苦とや申すべき、されば落ち散りし飯粒を拾ひ食はんは大名に似合はぬことなりなど云ふ流俗の説に従ひて疎末にいたさるべきものには候はず、若殿の膳部の上より落ちたるものに候へば自身拾ひて召上るべきなりと人々列坐の前にて憚らず直言したる程なればまして其子息に對して姑息の愛に溺るゝとのなかりしは言ふまでもなし。希典其頃は心やさしき少年にて藩の學校敬業館に學びし時は文學の才自ら現はれ、自らも

讀書生とならんとする志もありけるにや父に請ひて萩の明倫館に遊學せんとしたるを今の世に儒生、文人となりて何をかなさんとす、讀書は勿論怠るべきに非れども武士たるものは先づ武藝を勵むべきなり、汝若し武藝を好まずば農夫となるべきのみ、ゆめ懦弱なる文人となる勿れとてその遊學を許さざりき。累代儒醫の家に生れたる希典が自然に儒雅の趣味ありしは父祖の遺傳とも云ふべし。されど希典は文ありて武なきは士に非ずとて子息を教ふるにも武道の吟味強かりしかば其子の希典は世界に雷名を轟かしたる名將となり、希典の弟正木正誼は其先輩前原一誠の爲めに勇戦して死にたり。一家兄弟二人の烈士を養成し得たる希典の風采、益す以て思ふべきに非ずや。

(七) 乃木希典、玉木文之進に學ぶこと

其頃萩に

玉木氏

文之進とて

聞へたる  
志士の巨魁と  
松陰の  
氣象も  
父祖の世に  
うとからざりし  
學問の  
國を憂ふる  
忠信の  
十郎ともに  
結びけり。

老士ありけり。  
かんばしき  
叔父なりければ  
それに似たりけり。  
血縁あれば  
伸なりし。  
筋も同じき  
志、  
誠も似たる  
友垣の  
されば十郎

關西の  
名を遺したる  
自ら  
正木と乃木は  
一類の  
それさへあるに  
人なれば  
人に接する  
文之進  
堅き契を  
其子をば

玉木の老叟に  
學べとて  
谷の門出る  
高き枝に  
おとなしかりし  
かしこみて  
人の心は  
火に似たり。  
いや廣がり  
なきがごと  
忠魂義魄

從ひて  
許してければ  
鶯の  
飛び移りたる  
若人は  
學の窓に  
佛説の  
一たび焚へし  
廣がりて  
志士仁人に  
死なずして

眞の道を  
春淺き  
古巢を立ちて  
心地して  
父の庭訓  
いそしみぬ。  
薪につける  
赤き火の  
焼かざる草も  
宿りける  
傳へ傳へて

若人も 國を愛する 丈夫兒と  
なりにけるこそ めてたけれ。

三二

希典の明倫館に學ばんとする志は父十郎の意見に依りて一旦は止められぬ。されど斯くてあるべきに非れば希典は窃に家を脱し萩に至り玉木文之進を尋ねて學問の志ある由を語り、其援助を請ひたり。玉木と乃木はその昔乃木善庵と云ふもの乃木の家より出て、本藩に仕へ玉木の家を起しければ濃き一類なり。されば乃木十郎と文之進とは親戚の交厚かりしと見え十郎の子息等は文之進を玉木の叔父など云ひ居りしもの、如し。然るに此玉木の叔父も父の十郎と同じく當世に生れて儒生文人たらんとするは心得違なりとて大に希典の不心得を叱りければ希典は頼む木蔭の雨の漏る心得して玉木の門外にすゝり泣きして立ちしを、玉木の妻室餘りに氣の毒に思ひしかば段々夫に懇願し、さらば我家に居て書を読みながら暇あれば農業

などして筋骨を養へよ、必ず文儒の柔弱に陥ること勿れとて始めて其門人たることを許ししかば希典はそれより玉木の家の塾生のやうにして學問に餘念なかりしとぞ。

此玉木文之進は名を正繼と云ひ吉田松陰の叔父なり。希典は江戸の藩邸に生れ松陰の刑死したる頃までは猶ほ江戸に在りしかば其面だにも見しことはあるまじと思はる。或は一見の機會ありしにもせよ、松陰が投海の計成らず、幽囚の身となりしは希典が六七歳の頃の事なれば後日の記憶に残るべきに非ず。されば希典と松陰は未見の人なりしと定むべきなり。さりながら松陰の叔父玉木氏の門生となり、日々其教を受けしかば松陰の人となりに就きては聞くこと多かりしなるべし。寅次郎(松陰の名)は身幹小さく、色黒く、白痘面に満ち、額廣く、頤尖り、肩上がり、頬こけ、鼻高く眼すどく、恐ろし氣なる男なりしかども、言語は爽にして人の挨拶などは柔和の方なり、酒飲まず、煙草を吹かず、諸事無頓着にて袖にて鼻汁をふき

たる程の男なれども至誠、物に接し、片言自ら欺かず、人の爲す能はざる所をなし、人の言ふ能はざる所を言ふ異物にて十四五歳の時より豪傑を以て人も許し、自らも任じたりなど玉木翁の話すを聞きては少年希典は面にあたり松陰に接したる心地して其偉大なる人物の威に撃たれたる感ありしなるべし。まして玉木翁は尋常の人ならず、松陰とは叔姪志を同すると云ふべき程の事にて水戸學派の書を愛讀し尊皇攘夷の志厚く、和流の徳術に熱心にして讀書人ながら武道に志厚かりし人なり。家を修むるに儉約一味の人にて郡奉行となりしときは清廉潔白を以て一藩に稱讃せられたり。此人常に淺見安正の靖献遺言を愛讀し、身を愛まらずして義の爲に捨つべきことを説きたり。希次の人と爲りと此人の趣向とを併せ考ふるときは二人の間には獨り親族の交ありしのみならず、同志同好の友たりしこと察すべし。かゝる父兄の薫陶を蒙りたる少年が後日に至りて君國の爲に不惜身命の節操を現はしたること敢て怪むべきに非ず。

或老人の話に文久元治の世に長州の英雄豪傑は好んで死を急ぎ外目よりは命を粗末にするやうに見へしもの多し。久坂義助なども死なで濟む所にて死にたりと云へり。思ふに其世には國家の獨立を全うするは人間焦眉の問題となりたれば志士仁人自ら身を殺して仁を爲すに急ぎたる傾なきに非ず。吉田松陰なども幕吏の訊問に逢ひしとき其問を受けざるに間部閣老要撃の計ありしことを自白し、好んで死地に陥りたり。是れ其故何ぞや、松陰の説に君子の心は理なり、體滅し氣竭ても理は古今に亘り天地を窮めて未だ嘗て欺まざるものなりと云へり、是れ其著述留魂録の大意なり。死すべき時に死するは正氣を天地の間に留むる所以にして死すべき時に活くるは天地の正氣を一掃する所以なり。其死を急ぎて後人を激勵せんとしたることも亦宜ならずや。志士仁人の雄魂毅魄は火の如し、一點の星火も焚へ廣がれば以て千里の野を焚くべし。松陰、希次、正韞等防長二州の英雄の心に焚へたる靈火は此理に依りて乃木希典等に移りたり。生命は生命を生み、

英雄は英雄を起すとはかゝることをば言ふなるべき。  
 希典の玉木家に在りし時なるべし、一日松陰自筆の士規七則を讀みて感奮し、師に請ひて其書を貰ひ受け、常に肌身に付け置しと世の人のする護身符など云ふものゝ如くなりしが、明治十年田原坂激戦の折に失ひたりと云ふ。按ずるに希典が玉木家に於て塾生同様の身となりしは十五六歳の時なりしと思はるれば、文久元治の交に當れり。されば防長二州に於ては内外の交渉多事を極め士氣最も旺盛なりし時なり。則ち文久三年五月には天下を驚かしたる馬關に於ける攘夷の手初あり。尋で其年の八月には親征延引の詔出で、長州藩人は本支藩共に入京を禁せられ、名高き七卿落の事ありて長州周防は志を京都に得ざりし志士の淵藪となれり。明くれば則ち元治元年にして其七月には京都蛤門合戦あり。八月の初には四國軍艦の長州入寇及び和議あり。十一月には三大夫自殺、藩主幕府に對して謝罪の事あり。希典少年と雖も此等の事變に遭遇して心緒の亂るゝと恰も狂瀾怒濤の中

中に立ちしが如くなりしなるべき歟。時世は英雄を作ると云へり。かゝる時世に育ちしものは自ら英雄兒たらざるを得ざるべし。

(八) 乃木希典明倫館に入塾す

『赫々として 八萬騎 屯ろしてあり 死ぬべきは 壯士劍を 砲聲の 是はこれ	威名ある 我長州を 浪華城。 問はん果して 杖にして 國の四境に 防長二州に	東藩の兵 襲はんと 我曹の 何の日ぞ。 笑みながら待つ 聞ゆるを』 さるものゝ
---	--	---

ありと聞えし  
歌ひける  
此に移せし  
奇兵隊。  
死にて報いん  
引受くる  
紅もゆる  
必ずよ  
慶應の世の  
兼てより  
明倫館に

高杉氏、  
漢歌をしも  
大和歌。  
期する所は  
國の恩。  
長門男兒は  
若き血を  
流さんものと  
頃とかや  
願ひしことの  
入塾す。

名は晋作の  
和らげて  
猛くはげしき  
何ものぞ  
幕府の兵を  
膽太し。  
正義の爲に  
誓ひてし  
乃木希典は  
許されて  
坐しては學ぶ

文の道。  
敵を恐れず  
しなからも  
師弟は共に  
なりにけり。

起ては習ふ  
あなどらす  
學びの窓に  
すぐれ人

武の教。  
軍の用意  
書を讀む  
後の鑑と

長州は元治元年十月藩主父子俗論黨に擁せられし爲め一旦幕府に對し謝罪  
降服の態度を取りたれども、元來藩士一同の志に非れば奇兵隊を始め所  
謂諸隊は幕府の命に従はず國論の振興を計りたり。されば其頃高杉東行が  
「身に漆し、炭を呑むは吾曹の事なり。防長の坏上を護し來らんを要す」  
と吟じ出でたるは誠に二州の輿論を道破したるものなりける。かゝりしか  
ば慶應元年正月東行等一呼して諸隊響應し、兵を擧げて萩に向ひしより日  
を數ふれば僅に十六日、凡そ十一戰して俗論黨悉く破れ、藩論主戰に一定

し、二月九日萩に於て毛利本家の君侯父子、長府侯、清末侯、毛利本家の家老以下會議してたとへば天下を敵とするも閩境志を一にして尊皇の大義を伸ぶべしと盟ひしより防長二州は再び義氣の一塊となれり。やがて長州侯は萩より山口に移りて戦備を修し、幕府は第二の征長軍を起し、五月の末には大軍既に大阪城に集まれりと聞えしかば晋作一詩を賦して曰く

赫々東藩八萬兵。襲來屯在浪華城。我曹決死果何日。

笑待四隣聞砲聲。

防長二州の士氣は斯くて大に振ひしが、此頃乃木希典は父の許を得て始めて萩の明倫館に學び文學寮に在りて文武の業を修めけりとぞ。當時明倫館にて教授の任に當りしものは西洋兵學には村田藏六あり。漢學には岡村箕齋あり。共に少年なりし希典に精神上の感化を與へしものゝ如し。村田は嘗て鎮西に遊び廣瀬淡窓の塾に遊び、後浪華に行きて緒方洪庵に學びたれば學は固より和漢洋を兼ねたり。江戸にて幕府の蕃書調所、講武所などに

出仕したるともあれば眼界闊大にして天下の形勢に通じたり。此人金佛の様なる見苦しき顔の男にて、世事もなく、愛嬌もなければ嘗て醫業を開きたれども病人來らず。自身も醫師としては流行せざることを覺りて廢業したりしと云ふ。長州國論一變の後本藩に擢んでられて明倫館に入り西洋兵學を教授し戰鬥術門と云へる普國の兵書を譯して生徒に授けたり。希典も恐らくは此人より始めて兵學の新智識を得たるならん。此人は容貌恐なるが如しとも云ふ程の地味なる人にて人に向ひても學者ぶらず、議論の花を咲かすることなく、至て大人しき方なりき。されば藩の政府の會議に出ても、何時も人にやりつけらるゝのみなりしかば石州の戦に其武功の彰るるまでは人皆之を侮り、醫者めが醫者めがと云ひしのみなりしとぞ。外撲の好奇心を喚起せしめたりけん。當時を想像すれば一種の快感を覺う。岡村箕齋は漢學者にして醇平として醇なる尊攘家なり。此人の講義を聽けば

儒夫も起ち、怯者も奮ひ、必ず王事に死なんと志を立てるに至りしとぞ。此人々幕軍既に長州の四境に迫りし時に於て學窓に在りて文武の業を以て青年子弟を教育す。正に是れ陣中に經を講じ、休戦中に武を練るに異ならず。入りては忠臣義士の節義を説き、出で、は劍を揮ひ、銃を放つ。坐して學ばんとするものは起つて行はんとする所なり。其學問の親切、着實なりしことは此に説くまでもなかるべし。

(九)

長州四境戰爭。希典小倉表出陣の事

防長二州の

粧へど

引て放さぬ

武士は

内は勇氣に

梓弓

外に雌伏を

みちみちて

春の狩野に

若鷹の

ゆゝしかりける

博しけり。

大將軍の

示せども

聲と形と

したれども、

智略にたけし

清くして

鳴らすことなく

待ちにけり。

唯だ一撃の

其様は

それに引かへ

威を假りて

内に軍の

ばかりにて

己を知りて

長州は

旗も動かず

泰然と

困うじ果てたる

機を待つ

世の喝采を

慕軍は

外に虚勢を

力なく

壓倒せんと

敵を知る

兵營の塵

鼓さへ

静かに敵を

慕軍は



兵を出して  
其後に  
遅々緩々の  
六月に  
弾は眞の  
なりにけり。  
四境に敵を  
たじろがず。  
此一戦に  
戦ひき。  
客兵の

一年を  
牛の歩に  
攻仕度。  
始めて開く  
弾にして  
待ちに待ちたる  
引受けて  
提封五十  
賭けよとて  
静かに  
来るを待ちし

空しく過ぎし  
さも似たる  
慶應二年  
砲門の  
實戦とこそ  
長州は  
しかも恐れず  
萬石を  
勇み進みて  
坐して  
長州は

朝氣鋭く  
岩はしる  
暮氣につかれし  
士氣散ず。  
世の豪傑の  
長州の  
二百六十  
いかめしき  
二十に足らぬ  
此時よ  
書卷を抛ち

士氣振ひ  
水の出ばなに  
幕軍は  
此戦は  
預じめ  
勝となりけり。  
有餘年、  
覇者の權威は  
若人の  
先輩の士に  
銃を取り

其勢は  
殊ならず。  
客地に慣れず  
かねてより  
思ひし如く  
かくてこそ  
柳營の名の  
地に墜ちき。  
乃木希典も  
従ひて  
海を渡りて

豊の國

武功ありきと

小倉表の

人は言ふ。

戦に

希典、明倫館に學びし時、幕府は再度の長州征伐を聲言したれども、其實十分なる戦争の準備もなく、其上薩藩は此戦争には名義なしと抗辯して兵を出さず、其他の諸藩にも異論多く、譜代の小藩を除きては幕命の如く出征するものも少き模様なれば幕府は恰も太刀を抜きて上段に構へたれども、それを打ち下すこともならぬ程の窮境に陥りたれば虚喝を以て長州を威嚇し、謝罪の名義を立てさせて穩便に片付けんとしたれども、長州は國論既に一決して更に動搖せず、一步も譲る氣色なかりしを以て、幕府も其處置に困うじ、此上は征討の外ある可らずとて慶應元年五月十三日將軍長州征伐を聲言して江戸を出發したりしより足掛十四ヶ月にして同二年六月始めて軍艦を以て長門周防の沿海を砲撃し、周防大島郡に攻入りたり、是を戰

争の始として長州人の所謂四境戦争となりたれども、幕軍は全く成功せず、長州軍却て攻勢を取り、天下始めて徳川氏の能く爲すことなきを知りたり。斯かりしかば希典も固より學窓に安んずべきに非ず、書卷を抛ちて從軍し、高杉晋作の部下となりて小倉戦争に参加し、いさゝか負傷したりと云ふ。希典此時十八歳なり。是をその初陣とす。高杉は此年二十九歳なり。高杉は奇癖ある人にて大の天狗なり。何人も眼下に見下して之を漫罵し、殆んど眼中人なきが如し、氣宇濶達にして細事に拘々たらず。膽略あり。事に臨みて惑ふことなく、機を見て動き、奇を以て人の意表に出づ。小倉表の戦にも薩州の使者村田新八と色々話などし、へた／＼と笑ひながら氣を付け居りしが敵は肥後の兵などにて強かりければ晋作下知して酒樽をかき出し、戰場にて開きなどして戦はせ、遂に之に勝ちたる從容不迫の氣象、人の及ぶ所に非ずと當時目撃者の一人たりし坂本龍馬は記したり。斯様なる先輩に従ひて初陣したる希典は最も善き兵學校の教育を受けたるものなり

と謂ふべし。我等は親しく希典に會して當時の光景を聞くを得ざりしを遺憾とするのみ。

(一〇) 希典伏見の兵營に入りて佛式の操練を

學ぶこと

去歲は王師 我國に  
今朝は 孤劍をさげて  
戰ふ身とは なりにける。  
今日の瀬と かはる浮世は  
たゞかはらぬは 大丈夫の  
志 千辛萬苦を  
王政復古の 業はしも

迫り來れり。  
他郷にぞ  
昨日の淵は  
夢の如、  
國に死なんの  
覺悟せし  
時勢の潮の

足早く 思の外に  
やがて維新と なりにけり。  
殊なれど、 誰れか王臣  
徳川内府 恭順し  
戦志なく 時を得たりし  
諸藩は勝を ほこりけり。  
兵は猶ほ 火の如くなり、  
燒きて已まねば 自らを  
古の かしこき人の  
誠なりけり。 その昔、  
御世なりき。 武士の力を

はかゆきて  
官賊の名は  
ならざらん。  
奥羽の兵に  
勤王の  
さはさりながら  
人を燒き  
燒くものなりと  
言ひけるは  
元弘建武の  
借りたまひ

王政復古  
つよくして  
再び雲に  
世となりぬ。  
武功にほこる  
ものにして  
公戦に  
治らぬ世と  
大村は  
思ひ惱みて  
計畫

したれども  
耀き出でし  
敵はれて  
史の鑑は  
丈夫兒を  
私闘に  
いさむ勇士と  
憂國の  
此事をのみ  
さまざまに  
國を治むる

四〇  
驕兵の威  
天日も  
世は尊氏の  
眼のあたり  
規律正しき、  
怯ぢて  
するまでは  
眉ひそめける  
只管に  
未來を思ふ  
良策も

人に知られず  
英雄の  
されど遺せし  
弟子も  
その弟子の  
純忠の  
香ばしき名を

悪まれて  
身は朝露と  
其業も  
國の寶と  
一人なる  
勇士となりて  
止めけり。

末路悲しき  
消えにけり。  
其教へたる  
なりにけり。  
乃木希典は  
今の世に

長州の四境戦争に勝ちしより幕府の威信忽ち地に墜ち、間もなく王政復古となり。維新の大業此に成れり。是れは維新の諸豪傑に取りても意外の大成功にて、かくまで早く埒明かんとは彼等と雖も豫期せざりしことなり。長州の俊傑桂小五郎(木戸孝允)は其時の感情を七言絶句に作り

去歲王師迫我境。

今朝孤劍入他鄉。

回頭世事渾如夢。

四二

一片依然男子腸。

といへり。彼等に取りては誠に夢の様なる僥倖とも思はれしことなるべし。然るに討幕の業は斯様に思の外早く拂取りたれども、是は日本國を立直す大事業に取りてはほんの前藝と云ふべきものにて、是より後の仕事の方が實は骨の折れしことなり。其骨の折れし難問題の中にさしづめ當面の問題と云ふべきは討幕の大功を立てたる諸藩の士族兵の處分是なり。たとへば其頃薩藩の兵士の京都に居りしものは俸給少して苦情を鳴らすものありしかば西郷隆盛、大久保利通の兩人相談し増額の相談をなしけるに參謀伊地知正治、それは宜しからぬことなりとて同意せず、其事自ら士卒の間に漏れ聞へしかば、伊地知は惡むべき男なりとて其外出の折を窺ひ、道に要して亂打し汚溝に投げたりと云ふ。長州にては桂太郎、第四大隊、第一中隊の隊長を命せられしが此中隊は諸大隊の中にも最もあばれ者の多き所に

て最初の隊長は部下が其命を奉せざるを憤りて屠腹し、第二の隊長は隊中に不服のもの多くして免職となりたり、桂は三度目の隊長を命せられたるものなり。此頃長州の諸隊は隊長を自選するの例多く此隊も藩の政府の命じたる隊長は氣に喰はずとて桂の前の隊長を迫出し、桂をも排斥せんとしたりと云へり。一事は萬事なり、是だけにても驕兵の御し難きを知るべし。維新の諸豪傑、此事に苦心するもの多かりし其中にも兵部大輔大村益次郎（則ち村田藏六の事なり）は首として驕兵を規律節制の範疇に歸り直し兵制を統一せざれば日本國の前途猶ほ危しとて、陸軍は佛國に倣ひ、海軍は英國に學び、全國劃一の制度を以て大改革を行ふべしとの論を建てたり。其論旨の歸着する所は維新の大功を爲したる諸藩兵の鼻梁を挫き、新式の訓練を之に與へ、其節制に服せず、若くは訓練に堪へざるものは之を解散せんとするに在りしかば異議紛然として起り、大村は惡まれもの、中心となりたり。されど大村は東西の形勢、古今の得失を見貫きたる豪傑なりけれ

四三

ば異論を排して其理想を實現せんとし明治二年を以て伏見にかたばかりの兵學校を建て佛式の訓練を始めたり。乃木希典は去年十月より本國豊浦藩にて報國隊の讀書掛と云ふを勤めけるが此時藩より選ばれて伏見の兵學校に入り諸藩の俊才と共に始めて西洋節制の兵學を學びたり。希典の履歷書に佛式操練傳習の爲め伏見御親兵營に入るとあるは此事なり。此事は希典に取りては眞に其生涯の運命を定めたる一時期と云ふべきものなり。仔細は其頃の薩長並に勤王諸藩の士族は自ら二の流に分れたり。一は則ち古風の壯士にして尊王の精神と武士の氣概とに於ては敢て人後に落ちざれども、何分中央政府の政局に當らず、或は一旦政局に當りたれども意見合はずとて忽ち辭し去りしかば天下の大勢には割合に疎く、日本の世界に於ける位置をも辨へざるものなり。二は則ち常に中央政府に居て世界に於ける日本と云ふ大局より世事を見渡し、權力を國の中心に集むる必要を覺り、其必要の爲めには私情を去りて公義に従はねばならぬと決心したるもの、

並に其人々の部下に屬し、其心事を知りたる故に自然中央集權の味方たりしものなり。希典なども若し藩にのみ居て世間に疎からば或は古風の壯士にして已みたらんも知るべからず。然るに二十一歳にて伏見に出で佛式の操練を學びて兵學の上より先づ西洋文明の畏るべきことを知るを得たるのみならず、諸藩の俊傑に交りて眼界も廣くなり、其上大村、木戸など云へる廟堂の中央集權論者より直接、間接に世界の大勢と日本の位置とを教へられては豊浦の報國隊中に居て書物を教へ居りし昔とは識見も自ら殊なるに至らざるを得ざりしならん。雨の分水嶺に落る時は相去る寸に過ぎずとも一水は裏に落ち、一水は表に流れ、須臾にして千里を隔つるに至る。人の運命にも必ずかゝる分水嶺ありと知るべし。さても大村は餘りに兵制政革に急ぎしかば、古風の壯士に惡まれ、此年遂に京都木屋町に於て長州人六人の爲に殺されたるのみならず、其主張したる改革を喜ばざるもの多く、翌年の春には長州に諸隊の暴動と云ふもの起れり。其事の概略を記さんに

大村は其存生の時より各藩の大兵を擁して自立の形あるを憂ひ、木戸と計り、先づ長州より例を示すべしとて藩主に勸め諸隊を解散せしめんとしたり。大村の危禍を買ひしは之が爲なり。然るに大村の死にたる後も其遺鉢を継ぎし陸軍大丞山田市之丞(顯義)も大村と同論なり、木戸も固より其心なれば遂に解兵の事を斷行したり。此時長州諸隊には自ら維新の功勞を恃み、中央政府の官吏を輕蔑するものもあり、政府の改革沙汰を喜はず古風の攘夷論を固執するものもあり、山口藩廳の命に従つて解散することを肯んせず、遂に暴發して藩廳を圍み、當時山口に居りし木戸を求めて之を殺さんとし、兵を分ちて木戸の旅寓と覺しき所に迫りたれども、其日木戸外出し居りしかば辛うじて危険を脱し馬關に出でしが、兼ねて隊兵の暴發に同意せざりし諸隊長は此時既に長府に在り、東京よりの援兵も來りしかば、兵を出して暴徒を撃破し遂に之を鎮定するを得たりしが木戸は鎮定を待ちて歸東したり。乃木希典は此年二十二歳なりしが此年正月暴徒鎮撫の爲め

歸藩し金古曾と云ふ所にて一戦し、二月伏見に歸營したりとぞ。此戰爭は長州人の二に分れし原因となりたり。此時前原一誠は諸藩の暴動は宜しからぬことなれども、彼等は維新の功勞あるものにて其精神も立派なるものなれば、我等廣澤眞臣と共に歸藩し、今度暴發の張本と聞えたる大樂源太郎等を説諭し無事を計ふべければ此一事、總て我等に委任せられたしと云へり。されど木戸等の説にては前原は元來保守主義の人にて内心兵制改革を喜ばず、諸隊の不平にも同情ある人なれば左様の人を遣し暴動の巨魁大樂などを善い加減の處にて妥協しては事態依然として改まることなく兵制を統一し驕兵を亡ぼすことは成り難し。是は前原を遣はさるるに如かずと思ひしかば自身出張し兵力を假りて朝威を示したり。前原は此處置を不快とし、自身の西下する能はざりしは三浦梧樓、木戸の意を承けて三條公を説き自分の西下を抑制せしめたるに依れりと云ひ遂に三浦と絶交したり。後年前原の暴發したるは是が爲なりと云ふ。是は後文に關係あれ

ば筆の尋に記し置くものなり。

(一一) 乃木希典大義親を滅すこと

晴れては曇る  
人心。  
多年の宿志  
世となれど、  
後門に狼  
書に記せし  
世のさまや。  
其大半は

さみだれの  
勤王無二の  
成就して  
前門に虎を  
入ると  
諺を  
全国の士族  
しづやしづ

空にも似たる  
豪傑が  
世は王政の  
防げども  
古の  
眼のあたり見る  
四十萬戸。  
しづのをだまき

くりかへし  
進歩を呪ひ  
多ければ  
まだ其頃は  
世の人の  
惑ひまどひて  
多かりき。  
時の政府の  
干城の  
大義に親を  
いさゝかも

古を今に  
文明を  
謀叛の沙汰も  
國の根の  
思ふ所も  
末遂に  
しかはあれども  
俊傑の  
武士の勤を  
滅ぼして  
悔ゆる氣色は

なさんとして  
悪むやからの  
まれならず、  
ゆるぎ易くて  
定らず、  
身を誤るも  
希典は  
苦心を知りて  
よく守り  
兎の毛の末の  
なかりけり。



五〇  
希典は長州藩藩暴動鎮定の後、明治四年十一月陸軍歩兵少佐に任ず。其前月は吉田松陰の十三回忌に當りければ長州に於ては一類中にてその祭を爲し、玉木文之進は詩を作りて自身の所感を述べたり。

於不可爲猶且爲。 丈夫本領自如斯。 正名明分心曾信。

尊夏攘夷義豈疑。 世事紛々長慨歎。 人情浮薄日推移。

知否十有三年後。 頑鈍依然獨守癡。

と云ふもの則ち是なり。此詩は希典にも寄せられたるべき歟。そは此時には文之進と希典とは獨り遠き親類たり、師弟たりと云ふのみには非ず、更に他の事情に依りて最も濃き中となりたればなり。仔細は文之進に一男兒あり彦輔と云ふ。此彦輔は元治甲子の戦にも出陣したる俊傑にして維新の東北戦争にも山縣有朋など、共に征討に従事したりしが不幸にして陣歿せり。老後に嗣子を失ひし文之進は是に於て希典の弟を養子とす、玉木玉誼則ち是なり。かくて乃木、玉木は再び祖先の時の如く兄弟の親を爲した

り。斯程の關係なれば松陰十三回忌祭典の事も文之進より希典に報じたるべく、斯程のものを作りたりとて書簡の端になど記し越したることもあるべしと想はる。さて文之進の詩の意を按ずるに是は松陰を追懐すると同時に自身の感慨を述べたるものにてその「夏を尊び夷を攘ふ、義豈に疑はんや」と云ひたるにて玉木翁は此頃も猶ほ古風の尊攘論を忘れ兼ねたる人なりしことを見るべく、其次に「世事紛々として長へに歎息す、人情浮薄日に推し移る」とあるにて翁が時世の進歩に對して悲觀する人なりしことをも察すべし。玉木翁が斯る感情を懐き居りしことは希典の生涯を考ふるには大切な問題なり。玉木翁は希典に取りては恩師なり、父執なり、一門なり、實弟の養父なり。當時玉木翁と議論感情を同するものは長州を二分して其一は則ち是なりと云ふも可なる程なり。松陰門下の俊才にして時の大官たりし前原一誠は其巨魁なり。希典は其人と爲りより云へば歴史と傳説に執着し、人情に動き易き人なり。されば一寸考ふれば彼も亦自然に

前原、玉木の保守的感情にかぶれそうに思はるゝなり。然るに希典が此際  
方向を誤らず、時の政府に忠誠なる軍人として善く其義務を盡くすに至り  
たる心理の解剖は當時の時勢を學ぶものには極めて有益なる問題なり。今  
其仔細を語らんに其時代には士族の勢力未だ衰へず、日本國にて國事を議  
論し、國事に盡力するものは士族のみなり。其上、明治四年に廢藩置縣と  
なりて法律の上には藩と云ふものは無くなりたれども、舊藩の士族は猶ほ  
其城下に一塊となり、武士風の生活を營み、武士風の感情を懐き居りたれ  
ば封建の形は破れたれども、封建の實は猶ほ存在したりと云ふも可なり。  
但し藩主もなく、家老、用人もなく職制の上より士族を指揮、統一するも  
のは全く無くなりたれども、其代に維新の前後に功勞ありし先輩、長者た  
るもの依然として盟主の形を取りたれば其人の心得次第にて士論を動かす  
ことも容易なり。中央政府の兵力が未だ強からず、鎮臺兵などは百姓、町  
人のみ恐るゝに足らずとて古風の士族は之を輕蔑したれば彼等には政府は

此方の腕力次第にて何時にても取つて代り得べきものゝ如く見えたり。か  
かる状態なりしかば全國の士族四十萬戸、悉く是れ虎狼の類にして一たび  
其怒に觸るゝ時は直に國亂を惹き起すべき勢あり、此士族の暴力を打破し、  
眞の統一の政治を布かんとするが其頃日本政府の要地を占めたる、岩倉、  
大久保など云ふ諸俊才の志なりき。然るに古風の士族の目より見れば時  
の政府は徒らに外國に摸倣する輕薄の政治をするのみにて、國家の柱石た  
る士族を壓倒せんとするものなり。斯る政府は畢竟亡國の端を爲すものに  
過ぎずとて之を嫉視したり。されば前原一誠の檄文にも俗吏、士を見ると  
士芥の如しと云ひ、政府士の常任を解き祿券を制す、其意不平を鳴らすも  
のあれば之を討滅するに兵力を以てするに在り、四十萬の士族何の罪かあ  
ると云へり。古流士族の感情を遺憾なく發揮したりと謂つべし。此新古二  
流の思想の衝突は今日より見れば分界誠に明白なるにて多少事理を辨へ  
たるものは別段惑ふともなかるべく思はるれども其時代に於ては彼我の間

を選擇して其是非を定むるは決して容易の業に非りしなるべし。されば故  
品川彌次郎子なども長州諸隊騷動の時は態度いさゝか分明を缺き、諸隊に  
對し同情の色ありしが爲に官途も同輩より後れたりなども云ふなり。ま  
して希典は親類一門の關係より云へば前原黨に近き人なり。其人と爲りよ  
り云へば寧ろ保守主義に傾き易し。さる人にして猶ほ善く時の政府の忠臣  
を以て始終し、誘惑に勝ち得たるは畢竟、伏見兵營在學以來常に天下の中  
央に居り、天下の後傑に交りたれば中央政府の苦心をも知り、世界の  
大勢をも學び、世の中は古流の士族の思ふ様のものに非ずと覺り得たる爲なり。  
居は志を移し、養は體を移すとは斯ることをや云ふべき。扱も希典は明  
治四年歩兵少佐となりしより、明治五年には東京鎮臺第三分營大貳心得と  
なり、明治六年には出で、名古屋鎮臺大貳心得となる。此年征韓論の爲に  
參議西郷隆盛、後藤象次郎、板垣退助、江藤新平、副島種臣等辭職し、隆  
盛を親み尊びし薩摩の文武官員は刀筆の末吏に至るまで職を辭し、近衛師

團の如きは殆ど空屋同然となる。同七年希典名古屋鎮臺大貳心得を免せら  
れ陸軍卿傳令使となる。時の陸軍卿は山縣有朋なり。傳令使と云ふは官房  
に勤務するものなり。同時官房に勤務せしものには小澤武雄、秋月新太郎、  
田島應親などありき。是れ皆其時代に於て陸軍省中の俊才と呼ばれしもの  
なりとぞ。此年佐賀の亂あり。同八年十二月十四日希典陸軍卿傳令使を免  
ぜられ熊本鎮臺第十四聯隊長心得を以て豊前國小倉に赴任す。時に二十七  
歳なり。小倉は九州の關門とも云ふべき所に於て昔より軍事上重要な地  
なり。りければ徳川氏の時代には此處に小笠原氏を封じて九州有事の日に備へた  
る程の事なり。希典の前任者は前原一誠の弟山田穎太郎なりしが、山田は  
兄と進退を同うせんが爲に辭任したりし故政府則ち希典を以て其後任とし  
たるものなり。  
今小倉を中心として其頃の世の有様を察するに恰も噴火孔上に舞踏すると  
云ふ程の危険の狀態に在りしと云ふべし。先づ薩摩には西郷隆盛を本尊と

したる私學黨あり。肥後には學校黨、神風連ありて時の政府に不平を懷き、福岡にも西郷黨あり、秋月にも征韓論に志を得ざる志士あり、馬關海峽を超えて長門に入れば萩に前原一誠あり、明治七年以來同志三千人と稱して防長二州に雄視し、縣官も其鼻息を仰ぐ程の勢なり、四國には民權論盛んにして土佐は其中心なり。何れを見ても不穩の空氣に滿つ。凡そは是れ皆不平士族の其所を得ざるものなり。今日の士族は平民と何の殊なる所なければ其不平論は單に議論に止まり、別段恐るべきものに非れども其頃の士族は封建時代の餘習未だ去らず、平民に對しては猶ほ威權あり、其上禁刀令の未だ布かれざる世なればいづれも武器を携帯したり。されば之を正式の兵とは云ひ難けれども變則の軍人と云ひ得べき程の武力なきに非ず。中には維新の時官軍となりて實戰に従事し戰場の駆引も心得たるものあり。左様の不平黨の中心に立ちて一個の兵營を守りし當時の希典は恰も敵前に城廓を構へたるの感ありしなるべし。然るに希典が赴任したる後、或日舍

弟玉木正誼、微行して小倉に來り、希典に面會したり。玉木正誼は其頃未だ二十前後の青年なりしかども前原一誠の參謀とも云ふべき位置を占めたれば來り兄を説き、一誠に同意せしめんとしたりしものと思はる。當時此の兄弟の間に如何なる談話の交換せられたるやは詳ならずれども、察するに正誼は前原の志を述べ、時の政府の政策を攻撃し、天下の形勢既に大變の時機に會したり、政府は既に公議輿論の敵となりたれば有志の諸藩士一呼せば其顛覆は日を期して待つべし、阿兄に於ても今より其心得あるべき歟など云ひて希典の決心を促したるものならん。正誼は愛弟なり、其養父の正韜は希典の恩師にして前原の親友也。希典もその人々に背くは情に於て忍びざる所ありしなるべき歟。さる弱點を察したれば正誼も來て其兄を誘ひしものと見へたり。されど希典は愛弟の遊説を斥け其不心得を論したれば此に大議論を生じ、互に其説を執て屈せざりしが正誼は阿兄の志轉らすべからずと見てければ、さらば暇申さんとして萩に歸りたり。希典も

是を今生の別なりと思ひければ弟の迹を慕ひて馬關に至り、同地にて兄弟水盃を取交し涙を揮ひ袂を分ちしと云ふ。兄弟の情は私なり、官事は公なり。公私の間に惑ふ所なかりし希典の態度は誠に明白なるものなりける。間もなく熊本に神風連の騒動ありて熊本鎮臺司令官陸軍少將種田政明、熊本縣令安岡良亮等殺さる。時に明治九年十月廿四日なり。之と同時に前原一誠、萩に據りて兵を起し、十月二十五日には秋月藩の壯士暴挙の事あり。希典此時小倉を警備し、十月二十七日營所の兵を出して秋月の暴徒と戦ひ、之を鎮定せしむ。萩に於ては前原戦敗して脱走を計りしとき玉木正誼單身刀を揮ひ官軍の前面に進み丸に中りて死す、前原等間もなく出雲に於て捕縛せらる。玉木文之進は前原の事に預らざりしかども義を重んじて祖先の墓所に至り割腹して死にたり。忠義の爲には親族一門を顧みざるは日本武士の特色なれども恩誼父に均しき師を殺し、愛弟を失ひたる希典の心中如何ありけん、思ひやるだにあはれなり。正誼既に死にければ文之進の後は

彦輔の子を以て其家を嗣がせたり。今の陸軍歩兵少佐玉木正之則ち是なり。

(二二) 西南戦争。希典武功の事

佐賀の江藤は  
神風の  
月の光の  
しづまれば  
衣を拂ひ  
西郷は  
大先生と  
春の花、

先づ破れ  
助もあらず  
暗くして  
世は太平に  
故郷の  
薩摩隼人の  
仰がれて  
鹿兒島灣の

神風連に  
秋月の  
萩の亂も  
かへれども  
山に入りける  
二万騎に  
霧島山の  
秋の月、

野くれ山くれ  
伍しながら  
時の變をば  
憤り、  
鹿兒島と云ふ  
歎きつゝ  
人も多かり、  
其中は  
輕しと云ひし  
極りて  
古今稀れなる

狩くらし  
雲を待ちける  
窺ひぬ。  
日本國の  
獨立の  
時の政府を  
鹿兒島の  
明治政府の  
人もあり。  
隆盛反旗を  
大亂と

六〇  
身は鹿猿に  
龍の如  
されば時勢を  
其中に  
國ありけりと  
嘲けりし  
事定らぬ  
鼎しも  
勢此所に  
ひるがへし  
なりける時も

希典は  
寡兵を以て  
一旦は  
されど武運は  
世に聞へ  
世の譽れをぞ

御國の爲に  
大敵と  
軍旗をさへに  
めてたくて  
人に稀なる  
得たりける。

奮戦し  
戦ひしかば  
奪はれき。  
勇名高く  
戦功に

西南亂(一) 希典植木の戦に聯隊旗を失ひしこと

明治七年の江藤亂、明治九年の熊本、秋月、萩の亂は申さば西郷亂の序幕にして其世の勢、鹿兒島の片付くまでは天下の事未だ定まらずと云べき有様なりき。されば前原騷の鎮定したる年の十一月九日に熊本鎮臺司令長官

を命せられ新たに希典の上官となりし陸軍中將谷干城も、其年十二月二十  
二日熊本より書を郷友に送り「芋(薩摩を指す)も先頃は一時動搖いたし候  
様子に御坐候得共先靜謐に歸し候由なり。孰れ他日の大患は芋に可有之と  
被察申候」と云へり。然るに薩人の勃發は「孰れ他日の大患は芋に可有之と  
など、悠長に考へ居るべき程の間隙もなく、谷の赴任したる後僅に三月を  
隔つるのみにて明治十年二月二十一日、薩軍は肥後國川尻に於て熊本城兵  
と戦端を開始し、此に所謂明治史上の大内亂とも云ふべき西南戦争の端を  
發したり。敵は古今無双の英雄、西郷吉之助なり、之に従ふ兵士は維新の  
戦争に實戦の經驗あり、若くは私學校にて訓練を積みたる刺戟決死の薩摩  
隼人二萬人なり。其上其頃は時の政府に志を得ざる諸縣の士族、何れも  
廟堂の政策を誹謗し、何事ぞあるならば竿を掲て起たんと待かまへたるも  
の多かりしかば、薩軍の風向きだに善からんには九州一團叛軍となるべ  
き勢あるのみならず、四國の土佐、出羽の庄内などは遙に西郷に應援せん

と密議を擬らしたるものもあり。東京の官吏中にも此騒のドサクサ紛れに  
政府の顛覆を企てしものさへなりし程なれば此戦争は明治政府に取りては  
實は其死生存亡を決すべき危機にてありしことなり。さても熊本鎮臺司令  
長官谷干城は二月上旬、薩軍既に叛旗を翻へしたりと聞きしより、九州諸  
縣の動靜を考へ、此上は攻守共に熊本城を根據として官軍の來援を待つ  
外なし、戦争には未熟の鎮臺兵を以て四方に走動して腹背敵を受け、手も  
足も出ぬ様になりては熊本城も敵の手に落つべく、さるとありては九州一  
團を賊にする結果ともなるべしとて胸中早くも戦略を決しければ二月十三  
日に訓令を小倉の第十四聯隊に與へ、全軍來りて熊本鎮臺に合すべしと命  
じたり。希典は此訓令を受けざりし前に筑後久留米は要地の事なれば小倉  
より同所に出兵し、豫め不慮に備へんと思ひ、其趣を鎮臺に通じたれども  
其議は行はれざりき。然るに禍機愈迫り、熊本出張の命を受けしかば、出  
戦準備の間に合ひし小倉聯隊第一大隊左半大隊のみは十四日に出發して熊

本に向はしめ、自身も其日熊本に入城したり。やがて城中に於て軍議あり。其軍議にては小倉聯隊は兼松より山鹿に出で城外より、城兵と相應じ、賊軍に當るべしと云ふことに決したれば希典は同十六日熊本を發し、十七日福岡に着し、福岡縣令渡邊清と諸事打合せ出陣の仕度をなせしに、谷中將より更に電信にて命ぜらるゝ所ありしかば同地屯在の第十四聯隊第三大隊にも出動を命じ、同十九日には小倉營所の餘兵も出陣し、共に熊本に向ひたり。同二十二日植木の激戦にて希典が聯隊旗を賊軍の奪ふ所となりしは此行軍中の事なり。希典の自ら語る所に依れば其戦況左の如し。

其月十七日、希典は福岡に歸り、縣令渡邊清と協議を遂げ、尋で電信局に於て、谷よりの命に接し、福岡屯在の第十四聯隊第三大隊にも順次出征の準備を爲さしめたり。小倉營所の餘兵も、速に出征の途に上るべき筈なりしが、其夜、エンピール銃を馬關に在りしスナイドル銃と交換すべき筈なりしに間に合はず、日を曠うして其至るを待ちたるも、斯ては

軍機を誤るべしとて同十九日、午後悉く征途に上れり。此兵は則ち第一大隊の右半大隊、第二大隊の左半大隊にして大尉青山朝之を引率したり。斯くて各隊進行後、一時間を経て、スナイドル銃馬關より到着するため、多數の工夫を使役し、第四中隊をして護送せしめ、疾驅して、エンピール銃と交換す。希典も福岡を發し久留米に至りしが、同二十日、馬場大尉熊本より來り谷の命を希典に傳へたり。其の命令に依れば最初の軍議を變じ全隊路を高瀬に取りて強行入城せよとのことなりき。是に於て希典は更に諸隊の行進を促がし、第三大隊の第四中隊を兼松に進め、山鹿に據て本隊に應ずべきを命じて先發せしめり。

同二十一日、希典は津下少佐をして、第一大隊右半大隊を率ゐて兼松より山鹿に向ひ、吉松少佐、青山大尉をして、南關より高瀬に進ましめ、自身も久留米を發して、夜、南關に着したり。同二十二日味爽、希典は松田軍曹に付するに四名の兵卒を以てし、先發急行して植木に至り、敵



情を偵察せしめ、第三大隊の右半大隊は、南關を發して高瀬に至れり。  
然るに此日は天氣清明なりしかども前日來の急行と雪後の泥路との爲に、  
兵士大に疲勞し、多くの足痛者を生じたりしを以て、希典は、兵士をし  
て或る寺院の階段を登らしめ、其健否を類別し、井上軍醫と謀り、足痛  
の兵は、温めたる酢を以て足を洗はしめ、疲勞したるは、食前に酒を與  
へ、一時安眠したる後に發せしむることとし、壯健の兵約六十餘名は、  
食後に酒を飲ましめ、先づ之を率ゐて、午後一時、植木に向て出發す。  
是は早く植木を占領せんとする戰略上の目的ありしが爲なり。斯くて希  
典の植木に入りしは、同日午後六時の夕景なりしが、大隊長吉松少佐は  
西南の驛端に於て、散兵を配置したり、其兵は一箇中隊に満たざるもの  
にして僅に六十餘名許なりき。適士民、敵の爲に炊きたる糧食を他方  
に運搬せんとするものあり。則ち之を奪ひて餓を療するを得たり。  
未だ幾ならず、薩軍より銃聲の發するを聞く、是に於て希典は先づ兵士

に命じて濫に發銃することなからしめ、賊の接近するを待ちて、之を撃  
たしむることしたり。是は徵兵令施行後、初めて兵士にて、訓練未  
だ足らざりしのみならず、一には彈藥の缺乏せんとを恐れたるが故なり、  
此時各方面より、兵士參々伍々來り會したれども、我全軍の兵數は二箇  
中隊に足らざる程なりき。薩軍の兵力は分明ならざれども、頗る少數  
なりしが如く、やゝ久しく交戦せし後、彼は一時退却するに至れり。  
薩軍一旦退却したる後半時間餘も過ぎしと思ひし頃、彼亦鼓噪して來  
り。其兵勢は、前に比して、頗る優勢なり。斯くて賊は白兵呐喊して本  
道の戦線に逼り、三面より猛進して植木の市街を包圍するに至れり。是  
に於て、希典は勢の持久す可らざるを知り、先づ軍旗を黒羅紗の袋に裹  
み、之を捲て少尉河原林雄太に負はしめ、死傷者及彈糧は、順次に人夫  
をして後方に運搬せしめ、殘餘の彈糧に火を放ち、烟の上るを合圖とし、  
戦線を左右に開き、右は吉松少佐、左は渡邊中尉之を指揮し、千本櫻日

櫻を一株の老に背進し、防戦の位置を撰定すべしと命じたり。此夜は恰も  
 舊暦の十三夜にて月色玲瓏、微風だも起らざる良宵なりしを以て、希典  
 は樅木、山口兩軍曹をして、火を彈糧に放たしめたれども、屢ば放ちて、  
 屢ば滅し、中々焚付かず、後には障子其他のものを集めて辛ふじて火を  
 點するを得、其火の起るを待ちて背進したり。  
 斯くて我軍は千本櫻に集り、隊列を検査したるに、河原林少尉一人のみ  
 見えざりしかば、希典は急に傳令使を馳せて、吉松少佐に問ひしに、少  
 佐答へて曰く「本道最後の激戦に、河原林少尉は、其部下と共に刀を揮  
 て突貫したれば、或は敵中に陥りたるやも知るべからず」と希典は軍旗  
 を敵手に委したるを憤り、返戦し之を取返さんとしたりしが、衆皆之を  
 諫止し、強て希典を昇さて、僅に退却したり。  
 此夜十一時頃、寒光天に滿ち、月影牙へ渡りしとき、希典等は木葉に着  
 したり。當時兵士の疲労甚しく、飲食をすら忘るゝに至りしものあり。

暫して渡邊中尉來り會す。希典中尉に河原林少尉の事を問ふ、「知らぬ」と  
 と答ふ。是より先き第三中隊長津森大尉、高瀬より來る。希典因て此隊  
 を以て、七本村の隘道に據り賊を拒ぎ、河原林少尉の所在を搜索せしめ  
 たれども、終に植木に入ることを得ざりき。  
 初め希典の背進せし時、後に吶喊の聲を聞きたり。是は薩軍の聲に非ず、  
 味方の聲にして是ぞ河原林少尉が、八名の部下と共に敵陣に突貫したる  
 ものなりき。少尉の死體は、植木驛端の左の崖下に在りしと云ふ。  
 河原林少尉は二十五六歳の青年士官にして、その人と爲りは沈着にして  
 大膽なり。誠に好箇の軍人なりき。  
 之を要するに此時賊の先鋒は熊本以北に向ひ居りしを希典は賊の未だ北進  
 せざるに先ちて熊本城に入らんとし、熊本城を去る三里の植木に於て優勢  
 なる敵に會し、月下に激戦し、背進の際に當りて軍旗を敵に委したるもの  
 なり。猶ほ當時、此戦争に参加したる杉原勝臣氏の手控と云ふものあり、

當時の戦況を見るべきものなれば下に抄す。

午後七時に至り賊兵の一團吶喊して本道の戦線に迫る。我軍始めて之に應じて射撃を開始したるが此戦最も猛烈を極めたるより賊兵其犯すべからざるを覺り、漸次退却すると數町我兵之を追撃し、將校も亦傷者の銃を執り、戦を援けて夜の九時に至りたるが、此時賊大に加はり百兵奮進吶喊雷の如く復た本道の戦線に肉薄し我兵防戦最も苦む。少尉試補板垣義重重傷を負ひ、彼我相混ず、紛戦亂闘、死傷甚だ多く、各線頻に急を報ず。敵兵愈増加し左右翼を張て、漸次植木市街を包圍し、飛彈縱横、守兵の背後を射る、是に於て到底持久すべからざるを察せしも、本道の敵を拒止せざれば退却の策行ふべからざるを以て、河原林少尉に軍旗を捲て之を負はしめ、近傍に在る兵卒十餘名を附し、策を授て之を本道の押に増加せしめ、火烟の上るを期とし戦線を左右に開いて背進し、千本櫻の近傍を收容部隊の陣地として防戦すべきを約す。既にして九時四十

分背進を始め、千本櫻に集まる。敵亦敢て尾撃せざるなり。是に於て隊列を檢したるに河原林少尉未だ來らざるより、乃木聯隊長之を衆に問ひたるに、本道最後の激戦中少尉刀を振つて率先して進むを見れば、或は敵中に斃れたるに非ざるかと云ふ。乃木聯隊長之を聞き驚駭し大呼して軍旗を失ふ何の面目か復た生還せんや、返戦して軍旗を奪還せん。衆我に従へと云ふ。此時奮つて戦はんとする者と諫止する者と相半せり。衆泣いて聯隊長を擁止し、後事を圖らざるべからざるを云ふ。此時第三中隊長津森大尉高瀬より來着したるより直に其隊をして七本村の隘道を拒守せしめて更に敵情を探り河原林少尉の所在を搜索したるも遂に其死骸も得ず戦線に前哨を配置し、其他の部隊は木葉村に村落露營をなす事としたり。

此時河原林少尉を殺して聯隊旗を奪ひ去りし薩人岩切正九郎なる人の自ら語る所に依れば當時の事情左の如し。

岩切は薩軍第四番大隊第九小隊に編入せられ、小隊長伊東祐高直二の部下にて押伍の役を勤めしが、熊本城攻圍の初日午後三時過ぎ、植木へ向て進軍の令下りし爲め、直に途に上り、薄暮向坂と云へる處にて、官軍と衝突し、戦鬪夜半に及びしが、兩軍亂闘混戦すること、數回、岩切は官軍の中に突入し、萬死中に一生を得たれども、部下と相失し、味方の所在搜索中、畑地の間に人語を聞きしを以て、馳せて、敵歟、味方歟と窺ひつゝありしか、突然後より薩軍の夫卒來て、後方を指し、低聲にて敵來れりと告げたり。岩切則ち直ちに後を振り向き、抜刀のまゝ馳せ向ひしに、前面拾數間にして、官軍の一士官を認め、之を燈したり。但し亂軍中の事にもあり、且此夜月色朦朧たりしたため、岩切はその殺したる官軍士官の少尉なりしか、中尉なりしかを判ずる能はざりしと云ふ。岩切則ちかの士官の佩劍と胴巻にしたる袱紗包の手帳のやうなるものを外づし取り、仰向けに倒れし死骸の、少しく横になりし時、士官の背腰に挟

みたるものなりしにや二尺許の旗の巻きたるが現はれたり。岩切之を分捕したるに適ま其所に薩軍の夫卒來れり。岩切は、彼に自分所屬部隊の夫卒なりやと問ふ。「然り」と答へしかば、岩切之を信じ、其者にその分捕品を携へ居るべく且死にたる士官の「ポケット」に在りし時計を取り來れと命じたり。然るに岩切は死にたる士官の傍にも敵影ありと思ひをりたれば「尙、敵兵あらずや」と、近方を搜索したりしが、約拾數間にして、廣き街道に出で、また約二丁許も南へ行さしに、岩切所屬部隊の一部此に休憩し、「睡りには勝てぬ、敵の來襲は恐れぬ」と云ひながら射をかき居たり。

此時は既に夜の十二時過ぎなりしが、距離遠からぬ人家に火災起り、岩切は畑の中に官軍の参々伍々敗走するを見たり。其火災の植木驛に起りしものなりしことは岩切も其翌日薩兵進軍の途次、通過の時之を知りたりと云ふ。尋で四面銃聲收まり戦罷む。岩切は此夜、植木を距る一里

半許の一部落に宿したり。翌朝、岩切は休兵して、昨夜分捕品を授けたりし夫卒を搜索したりしが適宜伊東隊長來り、岩切に向ひ、「其旗は村田三介の隊に在り、足下は何故に、最大の名譽ある軍旗を抛ち、之を他隊の夫卒に渡したる乎。抑も軍旗の分捕は、獨り足下一人の名譽のみにあらず、全隊の名譽なるに無慾にも程のありたるものなり」と満面に朱を濺ぎて、岩切を叱責したり。伊東は、岩切の父執にて二人の間は殆ど父子の如くなりしかば伊東は遠慮無く岩切を叱したるものなり。岩切は憤然として「余は亂軍中に在りて、一死を覺悟し居り、殊に押伍の役に居りながら部下を見失ひ、戦地にて進退を同するを得ざりしを遺憾に思ひ、自身の名譽、隊の名譽などを考ふるの餘地なかりき。余とてもさほどに無慾のものに非ず、左様に叱らるゝにも及ぶまじ」と抗辨したるに、伊東は「御身も亦岩切の子なりけり、黙つては居らぬ男なり」とて俄に其怒を霽らし、「昨夜の働は

天晴なりき。又何處へか進軍し、立派なる戦功を立てられたし」と云ひ、同時に、何時進軍するも差支へざる様、戦闘準備を整ふべき旨押伍のものに命じ、「村田三介に逢ひ分捕品の取戻しを談判せんとて」伊東は其儘立去りたり。

此日夕景に及び、伊東は再び岩切に會し、「村田も同郷里の人物にて、余等に縁故の遠き人に非れば、丈夫の雅量にてあの旗を我隊に譲らんには好漢なれども、彼は彼此言ひて渡さず。少壯の時代より一度否と言へば、容易に應とは言はざる中々剛腸の人物なれば彼が遣らぬと言ふ上は到底我隊に取戻し得る望なし」と語りたり。

岩切の官軍士官を殲したる場所は、熊本より植木に向ひて左傍街道の附近なる畑地にして、植木驛に接近したる處なりき。此時岩切は、味方を搜索して却て其士官に逢ひしものなり。その士官も、同じ境遇に陥りたるものなるべしと思はる。當時岩切は、前面に拾數人の一群あるを認

七六  
め、窃に之を窺ひしに夫卒は岩切に「敵來れり」と告げしかば、岩切は後  
方へ振向き、「敵は何處に在りや」と、一段低き畑地を望み、拔足にて徐  
歩する折、其低地の藪中より、頭を擡げ、左顧右眴しつゝある漢子あり。  
岩切が敵ありけりと待設けたりしとき、偶然にも眼前に頭を擡けたりけ  
れば一刀にて切倒し、低地に飛び下り、佩劍其他を分捕したり。岩切は  
當時其所に在りしは士官一人なりしや、將た引率の兵ありしやを記憶せ  
ずと云ふ。

或るとき伊東は、同志と會宴の席上にて、談、植木戦争に及び、「岩切は、  
聯隊旗を分捕して、村田の隊へ渡したり。當時、村田も我隊に渡さぬと  
は言はざりしが、遂に取戻すを得ざりき。されど自分にせよ、岩切にせ  
よ、村田との間柄は同郷里に成長したるものなれば何れにても同じこと  
なり」と言ひたりとぞ。

是は眞の説と見えたり。されば此戰に薩軍勝に乗じて植木の町に入り官軍

の本營らしき民家を搜索せしに、床の間にかの聯隊旗が立かけありしを見  
て、善ものを得たりとて大に喜びたりなど云ふは、無根の虚談なるべき歟。

西南亂(二) 希典聯隊旗を失ひしを以て一生  
の恥辱と感じ居たること、

此聯隊旗は陸軍少將野津鎮雄奮戦して取返したりと云ふ説ありて、其頃は  
東京にては其趣を錦書にして賣出したるものもあり。又之を取返したるは  
野津少將に非ず、希典自身なり、希典、軍旗を奪はれしとを憤慨し、僅少  
の手兵を引連れ、敵陣に驀進し幾多の犠牲を拂ひ、遂に之を取戻したりな  
ど云ふ説もあり。されど是皆爲にする所ある虚談なり。希典一生の間此事  
を苦しし其潔き自殺の原因ともなりたる程なれば今に至りては英雄の眞面  
目は唯だ正直に畫くべきのみ。扱も此軍旗の行方如何んと尋ぬるに此戰に

於て薩軍の隊長たりし村田三介は聯隊旗を得て大に喜び、熊本城責の前に  
かゝるもの得たるこそ大慶なり、早速西郷先生に御目に掛くべしとて特使  
を以て之を西郷の本營に送付したるに、西郷の機嫌斜ならず、やあ善きも  
のが手に入りたり、之を熊本城の官軍に見せ小倉の兵敗走して援軍の望絶  
へたるを示し、臆病なる鎮臺兵の膽を冷しくれんとて長き竿の先に結び付  
け、花岡山の上に懸へし、壯士に閨の聲を揚げさせて、城中の賊之を見よ  
とて嘲弄したり。城中にては始は敵の詭計にてさる偽物を作り我を欺くも  
のなりと思ひしが、日を経て後漸く眞のものなるを知り、扱は小倉の援兵  
は望なきかとして、流石の勇士もいさゝか心細く感じたりとぞ。希典は旗手  
還らず、聯隊旗の行衛不明となりしかば早速待罪書を參軍山縣有朋まで送  
りしが其儀に及はずとの指令を得たり。されど何でふ忘れてあるべき。日  
々夜々我聯隊旗は如何になりけん、と戰場にまどろむ夢の中にも、其事を  
思ひ出さぬ折もなかりしに熊本城、官軍と連絡を通じたる時、少佐別役成

義より始めて薩軍の我が聯隊旗を花岡山に樹て、城中を畏さんとしたると  
を聞き、扱は我聯隊旗は果して賊の手に落ちけり、さる上は一死を以て罪  
を謝せざるべからずとて、自殺の決心其表に現はれたり。別役はさまゝ  
に慰めて聯隊旗既に敵の手に落ちたり。足下唯だ一死を賭して之を取返す  
べきのみ。同じ死ぬることながら、屠腹して罪を謝すと云ふのみにては唯  
だ死を潔うすると云ふ迄なり。それよりは功を樹て罪を償ひ、然る後に死  
にてこそ丈夫とは申すべけれなど切諫、諷諭つぶさに至りしかば、希典も  
や、思返したる景色なりしと云ふ。實際其頃の希典は死なんと思切たる有  
様、同僚の眼にも餘る程なりしかば上官の谷少將も心配一方ならざりしと  
後に人に語りたり。然るに此聯隊旗を分捕したる薩軍の將村田三介は同年  
三月十一日鍋田の戦に戦死したりしかば其友人等此聯隊旗は村田の武功と  
して誇るべきものなれば、村田家に藏めて其家寶となさすべしとて村田三  
介分捕の六字を其旗の白地に大書し村田の遺髪と共に鹿兒島なる未亡人佐

和子の許に送りたり。其後官軍にては聯隊旗の處在を索めたれども久しく之を發見する能はざりしに、西郷等城山の露と消えし後十月に至りて遂に折田三之介なるもの、密告に依り鹿兒島下方限警視署の手に之を收めたり。其事情は下の如し。

折田三之介は、元と東京の人にて、樺山資綱の妾の弟なり。此戦役に薩軍に従ひ、輜重部附と爲り、後、官軍に降り、またその輜重隊に屬せしが、官金窃取の嫌疑に由り、下方限警視署に拘留せられ、薩軍の將卒と同じく檻倉に在り、獄中の談話にて、聯隊旗の由來を知り村田家に秘藏しありと密告したり。下方限警視署長は此密告に依り巡查を村田家に遣し、村田未亡人に尋ねたるに未亡人は「最早、疾くに之れを焼き棄てたり」と答へ、其事實を語らざりしかば、警官は、更に家宅搜索をなせしめ之を見出すこと能はざりき。佐和子は、良人の志を體し、聯隊旗を官軍に返さるるに決心したれば、初めは之を自身の肌にかくし居りしが、

或は身體検査に遇ふの虞あらんことを恐れ、之を蒲團の袖に收め、後には佐和子の實家大山家に移したるも、探偵益す嚴密なりしかば、夜に乗じ、蒲團と共に聯隊旗を後迫の枝次家に移したり。

下方限警視署に於ては、一方には、佐和子を召喚して之を詰問したるに佐和子は之に屈せざりしも、大山家は佐和子に自白すべきやう勸めしかば、佐和子も最初の決心を離し、聯隊旗の所在を自白するに至りしなり。當時警視署にては「焼き捨てたとの答辯では、其筋にも御考がある、飽迄旗の所在を申さねば、警視署に拘留を仰付けざる」と、畏したり。此時は恰も三介の二男藤八の誕生後間もなきとにて佐和子は始には下女に嬰兒を負はせ、共に警視署の白洲に出で乳を哺ませながら、「疾くに旗は焼き棄てました」と答ふるのみなりしが、自身若し拘留の身となりなんには産れ落ちて未だ何事を辨まへざるものをば、自身と共に獄屋に連れ行かざるべからず。是は誠に忍びざることなりとて初一念を離へし、有



體の儘に旗の在所を申立てたるものなりと云ふ。

此話は大方は誤なかるべし。其頃の警視署長たりし大塚某は聯隊旗は村田の宅に在りと聞き屬僚を従へ村田方に至り天井裏にて發見したりと自ら語り。是も異説なれども、大同小異なり。いづれにしても聯隊旗が戦後に於て村田家にて發見せられしものたるは疑ふべからず、希典が遂に自身の手にて聯隊旗を取返さんとする志を達せざりしは明かなり。駿馬は鞭影にも驚くと云へり。武門の恥を知ること最も強き希典が是を終生の憾事としたること思へばあはれなることなりける。

西南亂(三) 希典木の葉に激戦の事

さても二月二十二日の夜植木の戦は薩軍の大勝利に歸し希典は木葉に宿陣したり。此夜大雨ありき。明くれば二月二十三日拂曉、希典、先づ少數の兵を出して植木の方面に向はしめしに薩兵殺到し、我兵且拒ぎ、且退く、

希典さらば此所に敵を引受けよとて木葉に於て兵を本道及び左右翼に分ち靜に薩軍の寄せ来るを待ち掛け、敵を三百米突まで近け置きて扱後に三面齊しく急射したりしかば、薩軍も此不意打に驚き一時は退却の勢を示したれども間もなく彼は上木葉を隔て、地物に據り戦線を占め兩陣相對峙するに至れり。山鹿に向ひし薩軍も途にて木葉の方に銃聲の起るを聞き忽ち其方向を轉じ木葉の背面を襲ひたり。此時青山大尉一中隊を率ゐて希典の軍に合す。然るに本道より攻め來りし薩軍の勢猛烈にして數ば官軍の戦線に突貫せんとする色あり。本道の主將少佐吉松秀枝より頻りに援隊の増援を求めけり。希典、此時は左翼の山腹に在りて薩軍の迂回運動を監視し居たりけるが吉松の援を請ふこと頻なりしかば山を下り本道の陣地に至り、今は足下に分つべき餘兵なし、たとへば餘兵ありとも、左右兩翼の援兵を要すること更に急なり、本道の兵さまで寡きに非ずと思はる。足下若し援兵なければ戦ふに堪へずとならば予請ふ其任に當りなん」と云ふ。吉松笑ひ

八四  
て、「餘兵あらんには援兵を請はんと申したる迄なり。本道の事は決して御配慮に及ばず、貴殿は聯隊長にておはせば全軍の指揮をなしたまへ、久しく此陣に居たまふべからず」と詞すしく言放ちたり。希典も寡兵を以て大敵に當り、一死を期して寸歩も退かざらんとする勇士の一言に感激し、さらばとて吉松の陣地を去りしに間もなく本道の方に當り「ワッ」と云ふ関の聲を聞きたり。是なん吉松が其部下二十餘人と共に群がり來る薩軍の中心に向て銃槍突貴を行ひしものなりける。かくて心猛けかりし吉松も衆寡敵せず大傷を負ひ、其夜に至りて空しく戦場の露と消えぬ享年三十三歳と聞えける。此時薩軍の勢益々盛んにして官軍の右翼尤も苦戦したり。やがて日暮れぬ、官賊共に終日の大戦に疲れ、殊に賊軍は官軍が植木の敗北にも懲りず、思の外に陣地に執着して抵抗を續けたる勇氣を驚歎し、侮り難く思ひければにや夜に入りて少しく攻撃の手を弛めたり。希典は薩軍の勢、斯く猖獗なる上は一先づ退陣の外はあるべからずと思ひければ令を

各中隊長に下し、月の未だ出でざる宵闇に乗し右翼より順次に梯形を取りて背進すべしと命じたり。是れ此地既に守り難ければ本陣を石貫に移し、追間川に沿ひ戦線を占め薩軍の進撃を其一線にて防遏し後圖をなさんと思ひたる故なり。斯くて其仕度をなし先づ右翼の退却を促し、陣形を轉せんとしたるに、此時薩軍數百人早くも木葉山を越えて我が後拒と定めたる一隊に切入りて、之を破り、正面の薩軍も此勢に乗じ、波濤の如くに寄せ來りしかば、希典、今は容易に退陣もなり難し、此の上は潰兵を後拒の陣地たる稻佐の高丘に集め此に死生、存亡を決すべしとて馬に鞭ちて其方面に進みたれども薩軍の狙撃繁くして殆ど面を向くべからず。日は暮れたり、雨はしとくと軍服を濡すなり。砲火の煙、面に塞り、咫尺の間、彼此を辨せず。敵味方相混じたる白兵戦となり、はてはいざ來い、組んとて手を以て相搏つものさへあり。眞の苦戦となりてける。希典の馬は此時疲れて用をなさずなりければ主人を失ひたる吉松の馬に乗換へしに一九その馬に

中りしかば、馬は苦痛に堪かねて敵陣に飛入り、主なる希典は落馬したり。薩兵之を見て銃を揮て毆殺せんとす。伍長大橋と云ふもの身を以て希典を蔽ひ、少尉摺澤静夫亦聯隊長の危急なるを見て返戦し數彈を蒙りけり。希典は此僚友の助に依りて漸く萬死を脱し、木葉川を渉り寺田山に達するこ  
とを得たり。此時既に退陣したる官軍は聯隊長の影の見えざるに驚き途中より引返せしに希典も追付きたり。人々喜びて希典の状を見るに顔と云はず手足と云はず、打撲傷の爲に紫黑色の斑點を生じ苦戦の迹歷々たりしと云ふ。同廿四日は希典等は南關に引上げ、此所を守ること、定めたり。希典少年の頃は體質も弱く、心もやさしく、臆病の様子も見えしに今度の戦争に大丈夫の勇氣を現はしければ、昔し伊達正宗の少年時代に氣の小さく見えながら後に無雙の勇士となりけるに似たりとて郷黨の人々は其豹變を驚きしとぞ。

西南亂(三) 植木、木葉の戦争は乃木一代中の大功名と云ふべきものなること

さても希典は植木にては聯隊旗を失ひ、その翌日木葉にては大敗し、南關に歸りし頃は其部隊は恰も羽折れ、翼の摧ける鳥の如く誠に氣の毒なる有様にて自身も餘程心外に堪へざりしにや思詰めたる氣色面に表はれたりとぞ。さりながら其頃にも此戦争の始終を考へ希典が植木、木葉にて薩軍と激戦したることは希典一代中の大功名と云ふべきものなりと賞讃したるものもありき。仔細は此時九州に於ては熊本の城兵を除きて官軍と云ふべきものは唯だ希典の統率したる第十四聯隊ありしのみ。官軍第一旅團、第二旅團の博多に上陸したるは二月二十二日にして其夜は希典植木激戦の時なり。第一旅團の博多を發し筑後の松崎に入り、第二旅團の福岡を發し太宰府に向ひしは同二十三日にして其夜は希典木葉にて敗軍す、第一旅團、第

二旅團の筑後久留米に會せしは其翌日則ち二月二十四日なり。時間と距離とを以て之を計るに希典若し植木、木葉に苦戦し、薩軍の足をとむることなからんには官軍久留米に到達せざる前に薩軍既に兩筑を襲ふべし。筑前には秋月の殘黨もあり、福岡には西郷の黨あり。薩軍若し二筑の境に入らば或は其蜂起を見たらんも知るべからず。かくては九州遂に鼎の如く沸き、鎮撫も難儀となるべきに希典が兎も角も寡兵を以て勇戦し、薩軍をして南關以北に出でざらしめたるは谷氏の熊本籠城と共に偉功と稱すべきものなり。但し薩軍は鎮臺兵の弱きことを思悔り、熊本城を陥るゝことは容易の業なりと信じ、熊本落城の上は天下の名城を何の苦もなく乗取りたりてふ虚聲を以て人心を鼓動せんと思ひしかば、主力を此に集め全軍疾く進みて九州の要地を占むるに心掛けず、植木、木葉の戦勝を機會として直に大軍を北上せしめざりしを以て希典は死を免れ間もなく援軍來り薩人は攻勢を守勢に轉せざるに得ざるを至れり。此時、薩軍若し熊本城を外にして

懸軍長驅、直に北進したらんには希典は恰も長湫の戦に於ける本多平八郎の決心に均しく第十四聯隊を犠牲として一刻たりとも薩軍の進みを遅くし、一寸たりとも戦線を守り、官軍が敵の正面に精力を集中するに都合よき様に奮戦して命は御國に奉るべかりしなり。然るに官軍早く來着したれば希典と第十四聯隊とは滅亡を免れたり、是れしかしながら郵便、電信、汽船の都合宜しく官軍は十分に文明の利器を應用するを得たるが故なりとぞ。

西南亂(四) 希典銃創を負ひ、久留米病院に入院の事

是の戦は殆ど第十四聯隊獨立の運動と謂ふべきものなりしが、是より後は官軍の本營より派遣したる大兵も九州に到着したれば希典も其指揮の下に従ふことゝなりたり。さて前文にも記せし如く陸軍少將野津鎮雄は第一旅團を率ひ、陸軍少將三好重臣は第二旅團を率ひ希典木葉敗軍の翌日、

即ち二月二十四日を以て久留米に會したり。此日希典の副官中尉渡邊章久留米に至り木葉の敗を告げ薩軍來襲の勢あることを報ず。野津、三好等思ひけるは薩軍、或は熊本城を其儘にして長驅北上の策を取るやも知るべからず、しからんには彼必ず先づ高瀬を取るべき歟。彼所を敵に取られ高きに依りて戦はれては迷惑なり、此上は急に高瀬を衝きて機先を制するに如かずとて兵を進めしが薩軍も此時北上し來りしを以て、明れば二月二十五日高瀬に於て兩軍會戦す。希典此時第十四聯隊を率ゐて官軍の前衛となり戦闘に参加す。同二十六日午前五時希典、石貫を發し追馬川を越え左に向つて進む。時に薩軍の一隊白石山の高地を占め、民家の茅屋に隠れて發砲す、敵は高きに居り地物に據りて戦ひ、我は平地より進みしを以て頗ぶる苦戦に陥りしかば希典は馬を捨て、自ら左翼の戦線に入り、しきりに士卒を奨まし、猶も奮闘を續け辛うじて山端の凸角を占領するを得たりしも、敵は薩摩隼人の習なれば屢ば逆襲を試みて希典を惱まし、正午頃まで奮闘

を續け、勝敗未だ決せざりし折しも、後方より近衛聯隊の一部隊、來りて希典の兵に加はらんとす。希典此有様を見て「やあ、今になりて他隊の援を受けたらんには、勝つと雖も我第十四聯隊の功にはあらず。奮戦せよ、人々」と且罵り、且はげませしかば、全軍の氣大に振ひて、わき目もふらず、進撃したりしかば、さしもの薩軍も此に始めて敗北の色を現はしたり。希典此機をはずさず、益す銳氣を鼓して戦ひしかば、薩軍遠く植木に退却し、希典は追撃して木葉まで進みたり。やがて午後三時になりぬ。時に高瀬に本陣を据ゑし第二旅團三好少將より傳騎來りて、命を希典に傳へ速に退却せよとあり。されど希典は幸にして此要地を得たり、之を捨て去りて再び優勢なる敵の占領する所とならば、その回復は難事なり、されば此所を守りて明日總進撃の前鋒となり、直ちに田原坂を占領し、高きに據りて戦ふに如かず、田原坂既に我手に入れば以て賊の膽を破るべく、熊本城の聯絡に容易なるべしと思ひければ、御命令には候へども、願はくば我第十

四聯隊、獨立して明朝まで此に宿陣し、明朝、進撃の先鋒を勤めたし、此段御許を乞ひ候とて傳騎を返し、陣地の防備を嚴にして明日を待ちけるに傳騎再び來りて退陣を促し、少將の書簡さへ齎したり。書中には糧食の辨じ難きこと、明日の戦略の事など述べて一先づ枉げて陣地を棄去れよとあり。希典此上は強て我意を張るべきに非ずとて、一先づ石貫に退陣したり。木葉の要地は再び敵の手に落ちけり。此時若し希典の説の如く、戦勝の勢に乗じ大軍殺到して田原坂を取りたれば、後に至りて官軍の苦戦もあるまじかりしに、其建策の用ゐられざりしは惜むべきことなりと云ふ人もありき。同二十七日薩軍攻勢を取りて進み來り高瀬の激戦となる。此日は西南戦史中の一時期を劃すべき大戦とも云ふべきものにて薩軍は三道より其精銳を盡くして攻來り、此一舉に大局の勝敗を定めんとしたり。されば其戦闘も猛烈にして午前九時に開戦し、日暮るまで勝敗未だ決せず、三好少將は負傷し、希典も玉名村に於て左足を敵丸に打たれたり。希典の劍、

彈丸を蒙りて碎け散しに自若として一步も退かず、敵兵三人と組打して河中に飛び入り僅に一死を免れしと云ふは此時の事とぞ聞えける。斯様に夕方まで官軍頗る苦戦したりしかども、野津少將、急を聞きて南關より馳せ來りて正面の官軍に應援せしかば薩軍遂に敗れ、隆盛の弟と聞えし西郷小兵衛の戦死を見るに至れり。是より薩軍の戦略一變し、攻勢を取らず。田原、吉次の險に據り、専ら官軍の進撃を防ぎ、其間に早く熊本城を陥れんとぞ計りける。希典は此日の負傷頗る重かりしかば三月一日久留米病院に入りたり。久留米病院は希典が負傷したる翌日、則ち二月二十八日を以て開きたるものなれば希典は病院店開き早々の御客様なりき。

西南亂(五) 希典久留米病院脱走の事

希典は三月一日より同十四日まで二週間薬餌に親みたり。されど病院に在りながら戦場の模様を聞きては、何時まで斯くてあらんことは口惜き事な

りと身を悶へたることならんと思はる。希典入院の翌日熊本城の伍長谷村計介、辛うじて敵中を馳せ第一旅團に達しければ官軍諸將始めて熊本城中の消息を知るを得たり。計介の事が病床に横はりし希典に聞えしや否やは詳ならざれども、若し聞へたらば希典もその人に依りて日夕念頭をはなれざりし城中僚友の辛苦をも聞かんと願ひしなるべし。計介の事は小學校の教科書にも記しあれば此には述べず。但し希典も計介の人物を信じて嘗て重要な任務を命じたるとありしは或人には初耳なるべし。そは去年熊本に神風連の騒動ありし時の事なり。折しも熊本鎮臺の參謀たりし大尉大迫尙敏は官用ありて小倉滞在中なりしが熊本に事起りぬと聞きて直ちに歸らんとせしとき希典はかゝる際には殊に心利きたる膽勇の士なればとて其頃小倉の營所に在りて伍長たりし計介を同行せしめたり。斯くて計介は大迫大尉を無事に熊本城に送りたる後、熊本表の状況を營所に送り報せんとしたるにたまゝ山口、秋月の亂起りしかば鎮臺にては計介に柳川士族の動

静を探り、若し異状あらば速に還り報せよ、異状なくば其趣を鎮臺に報し、汝は小倉に還るべしと命じける。計介命を受けて人力車夫に變装し柳川を偵察したれども何事もなかりければ其儘小倉に歸りしとぞ。斯様に自身に關係ある人物なれば希典も病中にて計介の事を聞きたらば會ひたく思ひしとなるべし。さても希典が久留米病院にて療治に日を送りし間には西南戦史中に於て前後比類なき大戦と聞えし田原坂、吉次方面の戦闘あり、薩軍無慮一萬の精銳を集め、高きに據りて低きに臨み、逸に居て勞を待ち、二旅團に満たざる官軍を惱まし、官軍は仰攻の不便を忍び、剩へ陣形敵前に暴露したる弱點ありしかば、心は矢竹にはやれども、容易に此天險を抜く能はず、空しく一勝一敗に日を過ぎたり。此天險が抜けざる限り熊本城との連絡も通じ難く、もし其間に城兵城を持ち切れずして、陥落の不幸を見ることあらば戦場の形勢も、人心の向背も面白からぬものとなりなんとて官軍に於ては些かあせり過ぎたる氣味ありしかば死傷の數も多かりき。

希典今年二十九歳、血氣正に盛なり、身は病床に横はれども此様子を聞きては何時まで安閑として療治を受け居らるべき。三月十四日、今は創も大抵は平癒したり、いざ再び戦場に赴かんとて醫員に断はらず、病院を脱け出で其儘戦地に赴きたり。されば其頃希典を渾名して脱走將校と云ひしものもありとかや。希典久留米病院退院の日は則ち名高き拔刀隊が始めて田原坂に於て側面より賊陣に斬込み、其勇名を世上に轟かしたる時なりける。『兩陣の輪贏、猶ほ未だ分たず。千砲萬銃日に紛々たり。刀光一隊勢電の如し。撃破す田原坂上の雲』と谷將軍の歌ひし如く斯様に元龜天正の戦記を見るやうなる變則の白兵戦をさへ行ひて敵陣を強襲したるを思へば官軍があせりにあせり、はやりにはやりて此難關を突破せんとしたること思ふべし。斯くて三月十八日となりぬ。此日野津(第一旅團司令長官)、大山(巖、三好重臣負傷につき臨時第二旅團司令長官たり)兩少將、幕僚を本陣に會し、軍議の上、我軍此處に敵と相持すること既に十有六日に及べり、

激戦殆ど間断なく將士死力を盡すと雖も未だ以て敵兵を驅逐し熊本城の圍を解く能はず、斯くて空しく日を渡らば遂に落城に及ぶべき歟、今は萬死を賭して戦ふの外なしとの評定一決し、最高度の強襲を爲さんには先づ將士の疲勞を休め新銳の元氣を養ひ而る後に進撃するに如くはなしとて同十九日は一同休養す。此夜雨あり、翌二十日の曉に及ぶ。かくて天猶ほ暗き三月二十日の午前五時細雨霏々として降りける間に、一軍陣地を發し二俣方面より谷を涉り、横さまに阪路を過り、潛行して敵壘の上に攀ぢ、午前六時、號砲三發の轟くと共に不意に敵陣に切入りしかば薩軍大に驚き、是より全軍潰亂し久しく抜けざりし田原坂の天險も此所に始めて陥落を見るに至れり。是に於て官軍は勢に乗じ北ぐるを追うて直ちに植木を取り、向坂に於て再び激戦したり。されば先づ田原坂の敵壘を驚かし、遂に之を陥れたるは二俣方面より進みたる官軍にして、固より勇士猛卒多かりし中にも希典はその最も最も勇戦したるもの、一人なりき。彼れ創痕未だ全く癒



へざりし身を以て此大冒險の戦闘に加はり、難攻不落の敵壘に突貫し諸將士と共に官軍二旬の鬱懐を散ずるを得たり。かくてぞ希典が命知らずの勇士たる評判は官軍の陣中に於て愈よ高かりき。此戦ありし翌日希典は當分第一旅團參謀兼勤を命せられ陸軍少將野津鎮雄の幕僚とはなつてけり。

西南亂(六) 希典熊本城入城の事。熊本鎮臺參謀となること。

官軍既に田原坂を取りしと聞えしかば山鹿の薩軍は自ら守ること能はず、其翌日即ち三月二十一日に官軍の爲めに其陣地を奪はれたり。是に於て官軍は三月二十三日征討總督の本營を久留米より高瀬に移して漸く南下の勢を示したりしが薩軍は猶ほ植木、吉次嶺等の險要を扼し、此所を専途と防禦に盡力せしが、四月一日官軍遂に吉次の險を抜きしより薩軍の勢甚だ振はず、剩へ參軍黒田中將(清隆)の引率したる別働諸旅團は海運を利用して

肥後の南部に入り既に八代を取り、宇土に迫り正面の官軍と南北相應じて薩軍を夾攻すべき形を取りたれば薩軍の心もしどろになり、四月十五日策を決して熊本城の圍を解き西郷は其本營を人吉の山中に移し、戦争は此に一段落を告げたり。希典は三月二十日より四月九日まで植木、木留、邊田野等に轉戦したりしが、其日邊田野村の戦に於て一彈飛び來りて左腕を貫通したり。此日希典は第二旅團の少佐稻村貞務と共に官軍の右翼を指揮したりしに味方の中に敵の詭計に誘はれて妄進し伏兵に逢ひしものありし爲め諸隊大に亂れ遂に負傷するに至りしなり。同日此負傷の爲に希典は此度は高瀬病院に入院したり。既にして熊本開城の報を得しより創痕未だ癒えざりしかども一旦退院し、四月十八日を以て熊本城に入城す。希典が別役少佐より薩軍が花岡山に聯隊旗を樹て、城中を嘲弄したることを聞きていと恥かしきことに思ひしは此時の事なりとぞ。熊本城は二月二十一日賊軍の圍を受けしより足掛三ヶ月の日を數ふれば五十日程の間援軍至らず兵

糧、彈藥殆んど盡き、後卷の官軍既に近づき、砲聲時として遠雷の如く聞ゆれども、諺に遠水近火を救ふ能はずとやらんと云ふ様なることにて、城中今は餓餓の急を感じければ、兵を分ちて攻撃軍突圍軍との二となし、如何にもして城外の援兵に合せんと計りたり。此突圍軍の中にて先づ成功したるは、少佐奥保章の率ゐたる部兵一大隊にして、四月八日敵中を馳突して宇土に達し、始めて黒田參軍部下の別働旅團に合し、城中積日の勞苦を語ることを得たり。黒田は奥の報告に依りて、始めて薩軍の状況を審かにしたりければ、それより兵を左右翼に分ち、二方面より進んで薩軍の背後を攻撃し、四月十四日左翼の軍、曉に乗じて川尻の薩軍を潰走せしめ、中山川浩一中隊を率ゐる長驅して先づ熊本城に入りしかば城南の一路始て通じ、翌日黒田參軍別働諸旅團を率ゐて整々堂々として入城したり。木留、植木等の薩軍も此勢を見て各陣地を棄て去りしかば高瀬口の官軍も進みて入城し、同十六日には山縣參軍、諸將校を率ゐて此に會したるより、城中の勇

士も萬死の間に一生を得たる喜に堪へざりき。希典は僚友に會して此に勇ましき物語を聞くにつけても聯隊旗を賊に奪はれし恥辱の感情は愈よ強く、吾唯だ潔く死なんのみと云ふ心のみ切なりける。やがて四月二十二日になりぬ。此日希典は陸軍中佐に任じ、第十四聯隊長、小倉營所司令官心得、出征第一旅團參謀の本職並に兼任を免せられ、熊本鎮臺參謀に専任したり。按ずるに希典が斯く攻城野戰の任より帷幕に坐すべき參謀の職に移りたるは一には希典既に二回の創痍を受けて未だ全く癒えず、戰場に馳驅するに堪へざりしこともありしに依ると見えたり。そは此後も希典が療治の爲め熊本以外の地に靜養したりしことあるにて知らるゝなり。されど他の重なる理由は希典、聯隊旗を失ひし初より、しきりに死地を求め、わざ／＼危険を冒すの風ありしかば此後猶ほ實戰の場に出さば、彼必ず死なん、可惜勇士を犬死さすべきに非ず、しばらく參謀部に置きて彼が思詰めたる心の和らぐを待つべしと云ふ先輩同僚の注意より出でしものと思はる。かゝり

しかば希典は心ならずも日々城中に勤務して砲煙彈雨に遠ざかり、兵士の差引、將校の任命、新兵徴集、總督府との交渉、帳簿の整理など云ふ事務に其日を暮らしたり。其頃熊本城は官軍策戦の中心とも云ふべき場所となりたれば参謀たる希典も中々多事なりしことならん。然るに薩軍は熊本城の圍を解くと共に西郷隆盛退きて人吉に據り此に官軍と抗戦すること、月餘、猶ほ進出の機を窺ひしが五月に至りて其一隊、急に豊後に入り重岡、竹田を取る。肥後國阿蘇郡馬見原に在陣せし熊本鎮臺の兵、轉じて之と戦ひ、尋で鎮臺より派遣せし援兵も亦至り五月二十九日竹田を回復す。同六月一日薩軍人吉を守る能はずして隆盛、日向の宮崎に移る。豊後口の薩軍は敗兵を三重市に集め勢復た振ひ此日白杵城を抜く。同日熊本鎮臺兵警視隊と合して白杵を復す。薩軍重岡、佐伯に走る。鎮臺兵警視兵追撃して重岡、三國峠、旗返、陸地峠等の險に戦ふ。薩軍克たずして日向に走る。是に於て豊後方面は一たび敵なきに至りしも間もなく同二十四日、二十五

日薩軍再び官軍の守線たる赤地、陸地峠に襲來し、中隊長小葉竹大尉、板垣中尉等の死傷あり、官軍一時守地を退却したれども辛うじて之を回復し薩軍遂に志を得ると能はざりき。但し此時鹿兒島は既に官軍の占むる所となり、薩軍は已むを得ず日向地方に退縮し、手も足も出ずと能はざる仕儀となつたれば、此上は精銳の卒を擧げ一舉して死生を決するの策に出でざれば復た其存在を保つこと能はざるべき勢となりしのみならず、薩軍の脱出には豊後地方は最も便宜の所の如く思はれしかば山縣參軍は之を憂ひ、熊本鎮臺司令長官谷干城の出陣を促しければ谷將軍は七月一日熊本を發し、七月五日重岡に出張、大分口の總指揮を掌ることゝはなつてけり。此時も希典は熊本城に在りて簿書推裏に没頭し、空しく同僚の戦場に戦ふさまを想像して頻りに羨望の念ありしのみ。かゝりしかば七月十一日希典は熊本より書を戦地の谷將軍に發し希典不肖には候得共、近日傷所も全癒し、山野の奔走も相試みたるに、動作も十分なれば今一たび戦場に出で、盡力致

一〇四  
したしと云ひき。是は當時戦地に戦ひし同僚陸軍少佐兒玉源太郎負傷の事ありたればそれに代りて出陣の事を望みしなり。谷將軍も希典の情を憫れむべしと思ければ今は希典を實戦に臨ましむるも宜しかるべきや内々其様子を申越さるべしと、時の鎮臺參謀總長中佐樺山資紀の意見を求めたるに中佐は乃木、兒玉交代の儀、御申越の趣承知せり。即今にては乃木を戦線に出したりとて過日の如き過激の舉動はあるまじく存ず、其上尊公御在營の上は其邊の事は毫も懸念なけれども、小生の負傷も未だ癒えず、兒玉の創も輕からざれば鎮臺參謀の劇務には間に合ぬこともあるべし、されば今暫く乃木出陣の事を猶豫せられならば當方の都合も宜しかるべく存ずと答へたり。斯くて希典は猶ほ事實上諸友僚の爲に抑留せられしが八月の初に至りて始めて志の如く出陣することを得、其十七日可愛嶽の戦闘に参加したりしが其翌日には此戦記に名高き可愛嶽薩兵突出の事ありき。斯くて希典は其二十二日に熊本に歸城し、再び參謀の任に當り、九月二十四日西郷

桐野、村田等が城山の露と消ゆるまで復た實戦に臨まざりき。

希典陣中之作

指揮刀閃曉雲破。競進兵如狂浪翻。

立馬判功山上見。先鋒已入杏花村。

(一三) 希典、湯地氏を娶ること。獨逸に遊學すること。豊橋旅團長を辭したること。

大君の爲に  
乃木希典は  
功を成し  
花柳の巷に  
勇ましと

死なんと  
運強く、  
名は郷黨に  
遊びても  
歌姫にさへ

誓ひてし  
年若くして  
かくれなし、  
青年士官の  
思はれぬ。

名家の子をば

洋行す。

誘惑多き

さそはれず、

自らなる

満月の

修養の功

なりにける。

妻にして

人の羨む

境界も

にごりにそまず

眞心は

かゞやき出てし

積みければ

遊學の爲めに

身の上も

彼は惑はず

世に狎れず

雲を破りて

如くにて

武士の模範と

青年士官たりし時代の希典の行儀の事

希典は父の嚴重なる庭訓に従ひ武士の道を磨きたれども、青年にして官途

に出仕し、天下の才子と交りたれば其始は行儀も其世の風俗に連れ小廉曲  
謹は丈夫の爲すを潔しとせざるなり、酒飲むべし、兵用ふべし、酒飲まざ  
れば英雄の士に非すなど云ひて同僚の付合には花柳の巷に遊ぶことさへも  
辭せざりしと云ふ。さりとはあの嚴重なる將軍がと訝り思ふ人もあるべ  
けれども其時代の軍人の行儀を知りたらん人はさることもありぬべしと首  
肯すべき歎。

希典、湯地氏を娶ること

希典は明治十一年一月二十六日熊本鎮臺參謀を免せられ歩兵第一聯隊長に  
補し、同月三十日去年の戦功に依り勳四等に叙し年金百八十圓を下賜せら  
るゝとなりたり。此春のことなり。希典は第一聯隊長となりたれば東京  
に移住し芝櫻川町に住みけるが聯隊副官伊瀬地好成の媒介にて鹿兒島縣士  
族湯地定之の四女静子を娶りたり。希典三十歳、静子二十歳の時とぞ聞え

ける。静子始は七子と云へり、定之の生みたる子女の中に七番目の誕生なりければなり。定之は鹿兒島の漢法醫にて漢學も出來たる人なり、殊に其内室は賢夫人の聞ありしかば子女の教育に意を用ひ静子にも讀書習字は申すまでもなし、同縣の士菊池某に就きて書までも學ばせたり。静子鹿兒島の新屋敷に生まれ明治六年の春十五歳の妙齡を以て父母に従て東京に移住し、赤坂榎町に住み、五年の後希典の妻とはなりけるなり。静子を知れる人の話に鹿兒島にては少年子弟の教訓には昔も土地に自ら一種の風俗ありて其人物を鍛錬すべき道も備はり居たれども女子の文字讀むは入ぬとなり、女の身にて男の様な學問するものは厭ふべく、惡むべしとて、女子には書物など教ふるものもなかりしを、静子の兄なる人、父に勸めて時勢既に變じて候へば、此後は女子と雖も書讀までは當世に恥しかたきに至らんも知るべからず、あはれお七なども書讀ませ候はゞやと云ひければさらばとて師を擇びて通學さすとはなりけり。然るに静子の才かしく學

問も思の外上達したりし故に師なりし人も其利發なるを感じ、同門の少女たちもお七さんには及び難しとて内々嫉ましく思ふものもありしと云へり。扱此二人の結婚こそ誠に乃木式とも云ふべきものなりける。たとへば希典或時伊瀬地と共に晝飯を喫しける折、伊瀬地に向ひ、母が頻りに家内を貰へと勸むる故、一時通れの口上に山口縣の女は御免なり、鹿兒島の女なら貰ふべしと言ひ置きたるに、近頃母は御身の所望の通り、鹿兒島縣人の娘を見出したたり、誠に良縁なりと思へば是非貰へと云ふなり。さりながら我心に染まぬ女は貰ひたくもなし。足下若し希典の妻として宜しかるべしと思ふもの、心當りあらば世話せられよと云ふ。伊瀬地は兼て静子の事を知り居りしかば其家庭、生立ちの事など物語りしに希典は結構なり、直ぐ貰ひ呉れよと云ふ。それは餘りに性急なり、兎も角も一度本人を見たる後に決せらるべき歟と云ふ。やあ左様の配慮には及ばぬことなり、僕たとへ本人を見ずとも家内として我家に迎へたる上は斷じて後日に至り諸君に御迷

惑を懸くとなかるべし、是非貫ひてくれたまへと云ふ。伊瀬地も然らばとて自身の新宅祝に静子も手傳として來るべければ其時見合をせられよとて分れたり。やがて其日となりぬ。希典の長官中將野津鎮雄、其弟同道貫、西、大島などの武官を始め凡そ五十人程、伊瀬地に集れり。希典も勿論此祝宴に列し、此處にて始て静子を見たり。斯くて野津中將表向の媒妁人となりめでたく合套の式を擧げたりとぞ。此見合の折は人々希典を揶揄しければ希典も面を紅に染めけり。湯地氏と野津氏とは通家の親あれば中將も乃木の妻は湯地の娘に限るとて喜んで媒妁の勞を取りしとも云へり。此頃の希典は磊落の軍人なりければ婚姻の夜も新婦は既に來りたれども、新郎は未だ隊よりかへらず。やがて歸りきたると共に賀客を相手に酒を飲み始め新婦に向ひては一言も發せず、はては其儘醉倒れて明朝まで熟睡したりしとぞ。

希典、獨逸に遊學の事

希典は先輩の引立もあり、職務にも忠實なりしかば追々官等も進み、明治十三年四月二十八日には陸軍歩兵大佐に任じ、同十六年二月五日には東京鎮臺參謀長に補し、同十八年五月二十一日には陸軍少將に任じ、第十一旅團長に補せられたり、時に年三十七なりき。同十九年十一月三十日御用を以て歐洲に派遣を命ぜられ、獨逸に遊學し、在學一年半に及び同二十一年六月を以て歸朝したり。日本の陸軍は其始め獨逸を模範とせしに非ず。幕府の末より海軍は英國、陸軍は佛國に倣ふべしとの事にて幕末の慶應二年には佛國士官シャノアスを聘して教官とし、明治政府になりても明治五年に佛國士官マルグリーを聘し、専ら佛國式を學びたり。されば希典なども佛國流の西洋兵式に育てられし青年士官なりける。然るに其後獨逸の兵學に注意し明治十八年モルトケ將軍の高弟と聞えたりしメツケルを聘したり

しより、日本の軍學は此に一變したり。されば此頃より、日本の兵制は始めて組織的の大軍を運用すべき準備も成り、戰場に於ける軍隊の指揮運用、並に宣戰と同時に豫後備軍を編成する法、戦時に於て土地と人民とより資源を得べき途に就きて新しき觀念を得るに至れり。希典の獨逸遊學も此時代に相應の事にて日本の陸軍が新面目を現はし來るべき一原因となりける。希典は獨逸遊學中、言語の通せざるにも拘はらず、善く獨逸軍人の生活を觀察し獨逸國の偉大なる所以はその軍人の節制を守り、規律に服し軍人たる面目を重んずること生命よりも甚しきに在りとし、歸朝の後儀も昔の磊落なるに似ず、専ら古武士の風骨を學ぶやうになりしかば人々其豹變に驚きけり。

希典、豊橋旅團長たりしとき辭職の事

斯くて希典は始めて歐洲の文明を觀察し、其節制の兵を見たりしが同二十

二年三月九日には近衛歩兵第二旅團長に補せられ、同二十三年には歩兵第五旅團長に補せられて豊橋に赴任したり。然るに間もなく桂太郎名古屋師團長として希典の上官となりき。桂太郎は其始め希典よりは下級の將校なり明治十七年陸軍大變革の時より桂、川上兩大佐の名は軍人社會に注目せらるゝととなり、先輩の信用も厚かりしかばめきくと出世し今は希典の上役となりぬ。諺に云ふ迹の雁が先になりしものなり。されば希典を善く知る人は希典常に獨逸軍人の氣概を賞し、獨逸の軍人は故なくして其後輩に班を越さるゝ時は自己の面目を損せらるゝものとし辭職するを常とす、是や誠に恥を知る丈夫の行と謂つべきものにて御國の軍人は猶更かくこそあらまほしけれなど言ひ居れば彼も後輩桂の下には尻こそばゆく思ふべしなど云ひけり。希典の此頃には於ける風采を想像し得べき一話あり。明治二十四年遠江國濱松に出張し、同國氣賀の方に赴かんとしたるに、郡長代理として郡書記某と云ふもの來り、氣賀にはよい御宿も候はねば同地の氣賀



半十郎方に御泊りありたし、氣賀は富みたるものに候へば粗末の御待遇も致さざるべしなど云ひしに希典は大喝一聲して乃木は未だ左様なる馬鹿者にはなりませぬと云ひしとぞ。是は缺乏に堪へ、困苦を忍び、大寒酷暑を厭はず、風雨雪霜の間にも露營の夢を結ぶべきが軍人の常なるべきに、國の大官なりとて田舎人などの款待するを善い氣になりて宿舎の粗末なることなどを厭ふものあるは惡むべきことなりと思ひければ、かくは小吏に一驚を與へしことならん。それより希典は遽に或る寺院に宿すること、定めしに、其寺の坊主も俗物にて、法衣など立派に着かざり、追従、輕薄の辨を弄しければ希典此處にも埒えず、其儘立あがり、寺の門前に在りし田舎旅籠屋の二階に上りたり。亭主は此珍客の闖入に遇ひて膽をつぶし、櫓の葉を折りて花瓶に挿しなどし唯だ謹んで居たりけり。希典亭主の飾りなき朴訥のさまを見て、始て破顔一笑し、副官に向ひ此處の亭主は感心の男なりと云ふ。希典其夜は副官と共に此茅屋に快く一泊し、翌朝出立の時、副

官に命じ主人に茶代を取らせよと云ふ。副官金五圓を出して與へんとせしに希典は「馬鹿、おれが出す」と云ひ自ら二十金を投じて去りしかば逆旅の主人も其茶代の多さに迷惑したりと云ふ。我が奢らざるは錢を愛むが爲に非ず、軍人の義務として温飽を願ふべからざるを以てなりとは希典の志なりしなるべき歟。かくて希典は明治二十五年二月三日を以て休職となり、暫らく閑地に就きたれば、希典の朋友はさてこそ彼は獨逸軍人の氣概を學び後輩の下に就くを屑しとせざりしなるべしなど噂しけるものもありき。されど希典は其年十二月八日を以て歩兵第一旅團長となりければ左様の噂も自ら立消の様になつてけり。

(一四) 日清戰役、希典滿洲に出征の事

日月梭の

如くにて

城山の秋

露深く  
征韓論に  
壯士の  
高麗半島の  
波荒く  
日本の史に  
なりしとき、  
花園河口に  
戦ひて  
とり分け言へば  
いちじるく

人は甲ふ  
血はわきて  
骨朽ちてより  
風吼えて  
勇士再び  
例なき  
黄沙天を捲く  
上陸し、  
武功多かる  
蓋平に  
世に猛將と

古戦場、  
腕を鳴らせし  
十餘年、  
黄海に立つ  
矛を取り  
世の大戦と  
満洲の  
遼東の野に  
其中に  
勇戦の名の  
言はれたる

軍人ありき。  
誰なりと。  
三十路に足らぬ  
其人ぞ。  
乃木希典も  
置きそめて

其人は  
植木木の葉の  
壯士ぞと  
人は紅顔  
此頃は  
はや初老とぞ

問ふこと勿れ  
戦に  
世に歌はれし  
老い易く  
頭に霜の  
なりにける。

日清戦役(一) 希典、満洲に出陣の事

光陰矢の如く植木、木葉の戦には二十九歳の青年なりし希典も既に四十六歳の初老となりぬ。明治二十七年三月二十七日朝鮮の志士金玉均上海に殺され、尋で東學黨なるもの朝鮮の全羅道に起り、「夷倭を逐滅し、聖道を澄清す」てふ名を以て兵を擧げ、朝鮮政府の派遣したる招討使之を討ちて大

敗したりしを機とし、清國は我國との間に訂結したる天津條約に背きて豫  
 じめ我國に通知せず、大兵を出したりしより事起り、六月五日第五師團(廣  
 島)に出師の命下り、七月二十三日大島公使、兵を率ゐて朝鮮京城に入り、  
 同二十五日豊島沖の海戦ありて日清兩國始めて兵火を交へ、同二十九日牙  
 山、成歡の戦あり、八月一日宣戰の大詔を發せられ、同二十六日、日韓兩  
 國攻守同盟を結び、九月十五日、大元帥陛下廣島の大本營に御着あり、此  
 日我軍平壤を陥れ、翌日黄海の海戦ありて海上權を我手に收め、第一軍司  
 令官陸軍大將山縣有朋は廣島名古屋兩師團の兵を統率して既に朝鮮の地に  
 在り、日本の軍威大に揚がれり。希典の所屬長官たりし第一師團長陸軍中  
 將山地元治を始め第一師團の勇將猛卒は戰端の開けし始より、頻りに第一  
 軍の勇戦と羨み、清國も流石に大國なれば、清兵を朝鮮半島より驅逐し黃  
 海の海權を我海軍のものにするまでには必ず半年はかゝるべき歎。されば  
 我等が第二軍に編入せられ直ちに滿洲を衝かんはいづれ明年の春なるべし。

それにては餘り遅きことなりとて、いさゝか退屈の色なきにしも非りき。  
 希典此時詩を賦して曰く。

肥馬大刀尙未酬。 皇恩空浴幾春秋。  
 一瓢傾盡醉餘夢。 踏破支那四百洲。

○ 聞説滿洲山水奇。 鐵蹄欲踏上春時。

征途若過梅花地。 折得贈君一兩枝。

梅花の開く時節ならでは、鐵蹄を以て滿洲の野を蹂躪し皇恩に酬い難し、  
 唯今は酒でも飲んで四百餘洲を荒廻はる夢にても見るだけなりとて徒らに  
 髀肉の肥ゆるを歎じたる悶々の状態ふべし。然るに世界の諸國が眠れる獅  
 子なりと思ひし清國は其實張子の虎なりしかば、日本軍の向ふ所、戰つて  
 勝たざることなく、豫期以上の成功を博したれば、第二軍の出征も其期を  
 早め、其年九月下旬には第一師團も出征することゝなれり。師團長山地は

名高き猛將なれば出師の命を受くると共に家族を土佐の郷里に歸し、愛馬を宮内省に献じ、以て骸を馬革に裹むの決心を表し、部下の將校を芝紅葉館に會して暗に永訣の意を表し、九月二十四日を以て東京を出發したり。越えて二日、九月二十六日を以て陸軍大將大山巖第二軍司令官に補せらるゝ旨公表あり。十月十六日に至りて大山、山地、希典以下長門丸、横濱丸、名古屋丸に分乗し宇品を出帆す。大山大將は出發の際大元帥陛下より御劍を賜はりしと云ふ。秋高くして馬肥えたり。一軍の踴躍して前途の功名を期したること想ふべきなり。時は既に黄海海戦の後にて海上復た危険の虞なかりしかば掩護の艦隊を要せず第二軍は諺に云ふ裸の道中にて大手を振つて敵海を横行したりけり。

日清戦役(二) 希典強敵に逢はざりしこと。并  
に大連灣容易に日軍の手に歸したること。

斯くて第二軍は船艦相啣んで宇品を發し十月十九日の夕景には朝鮮大同江の江口に達し、それより海軍偵察艦の報告に基き同二十四日盛京省の東南岸に在る一小灣華園河口に上陸し、同六日を以て全軍の上陸を終りたり。此地は金州を去る二十一里、旅順を去る三十五里の處にて、旅順を東京とすれば小田原位の位置に當る。旅順、大連を陥れて其海軍の根據地を覆へし清國の喉首を押へつくべき任務を有する第二軍が斯様に敵に接近したる所に上陸を試みたるは我兵氣既に清國を呑み、眼中全く敵なしと云ふも可なり。全體斯様の敵前上陸と云ふは軍備優勝の國が劣等國に對して行ふを原則とするものにて敵を相當に尊敬したらば斯様の事はなるまじきなり。此時希典は第一旅團を率ゐて全軍の先鋒たりしかば、早く華園河口に達したるに落莫無人の地なり、敵は我が豫期したる通り隻影を見せざりしかば直ちに工兵に命じて棧橋を掛けさせ、それより人馬兵に上陸し、何の苦もなく先づ馬を滿洲の野に立つることを得たり。此處より七里にして魏子窩

あり、九連城より旅順に行くべき街路に當れり。希典等軍容整々として之に向ひしに此にも敵影なし。さらば直ちに金州に向へとて十一月三日我大君の萬歳を歌ふ天長節に山地師團長以下魏子窩を發す。希典は前衛の任を受け先陣を勤めたり。同五日希典先づ劉家店に達し前面の破頭山と云ふに敵ありと知りしかば、午前十一時士卒に晝飯を喫せしめ、直ちに敵壘の下に進み戦ふ。敵は天險に據り、高壘より俯撃し、我は低面より仰射す、地の利を敵に占められたれば戦鬪も思の外に長引きたり。されば希典は戦鬪四時間の後午後二時に一旦休戦し、午後四時に再び戦鬪を開始したれども敵猶ほ屈せざりしかば午後八時に至りて再び休戦し陣地を換へて明日を待つことゝしたり。此夜敵壘より發する砲聲轟々として絶へざりしも希典常の如く談笑し、はては露營の夢穩かに鼾聲雷の如くなりしかば兼ねて其勇名を聞き居りし兵士等も其大膽を感じたりしとぞ。同十六日午前六時希典を始め第一師團の諸隊再び破頭山を攻撃せしが、昨日の手並に懲りたる清

兵は忽ちの中に敗走したれり。さらば直ぐに金州を攻めよとて山地師團長の本隊は復州街道より希典の隊並に他の一支隊は金州街道より共に金州城に迫り希典の隊先づ敵壘に乗込みしに元より臆病神のつきたる清兵の事として是も直様敗走し旭日の國旗早くも城頭に懸へれり。山地中將は勇猛比類なき武將なりしかば此圖をはづさず、敵に息をつかさなとて其日直ちに大連灣砲臺攻撃の部署を定め希典は和尚島の砲臺を攻撃すべき任務を受けたり。抑も大連灣砲臺は獨逸人ハンチンケンの設計したるものにて西洋兵學の智識に依りて科學的に建築したるものなれば、壘壁も堅固に出來居り、クルップ砲大小四門を備ふ、いづれも自動回轉砲なり。若し一中隊の勇兵あらば攻撃軍の一師團を此に支ふることを得べし。然るに思ひきや清兵は金州落城と聞きて早くも腰を抜かし、大砲には彈藥を込めたるまゝにて倉惶として遁げ去りたれば、翌日（十一月七日）拂曉希典が和尚島の砲臺に迫りし頃は臺中早くも隻影を見ざりしかば、折角今日こそは少しは齒に立

つ敵もあるべしと心待ちに待ちたりし希典も暖廉に腕押しと云ふ様なることにて、しばらくは呆然たりしと云ふ、此日我艦隊に於ては陸軍を助けて大連灣の砲臺を夾攻すべしとの兼約を守り諸艦進んで大連灣に達したるに和尙島の砲臺に黒衣黒帽の日本兵あり、日本國旗の高く掲げられしを見て、陸軍が意外の功を成したるを喜び直ちに大連灣内の掃海に着手し、大連の軍港全く我手に期したりとぞ。植木、木葉の勇將たりし希典に取りては斯様なる樂戰は餘り法外なることにて戦争やら演習やら分別のつかぬことなりしなるべし。

日清戰役(三) 旅順陥落の事

大連灣既に我が手に入りたれば此上は直ちに進んで旅順港を攻むべき順序なり。此旅順港は誠の天險の地にて二十餘の堡壘あり、何れも泰西の新式に依り西洋人の設計にて造りたるものにて建築物全體の價直は五六億圓位

なりと云ふ程の事なり。されば西洋人などは城は東洋無比の鐵壁なり、砲臺は堅固なり、兵糧、彈藥は三年を支ふべし。背面の防備だに油斷なくし、たらば百年も落つることなかるべしなど、賞讃せり。然るに金州大連灣に於て清人の手並を知りたる第二軍は何の遠慮もなく此天險に向て馬を乗り出したり。今其大略を語らんに第二軍の中、山地中將の第一師團其外は十月十七日先づ金州を發して旅順に向ひしが、翌十八日土城子にて先に進みし一隊は優勢なる敵に會し中尉一人戰死、大尉一人負傷し、下士卒の死者十人負傷者三十一人に及びたり。是は餘りに敵を馬鹿にし過ぎたる勇士の過なれども、兎に角清人能く爲すことなしと侮りたる第一師團兵に取りては不意に蜂に螫されたる程の痛手なり。其上敵兵の我死者に對する處置は誠に殘忍を極めたるものにて、或は鼻を殺ぎ或は眼球を抉き、或は腹を裂き畢丸を抜きなどしてありければ之を見たる我兵士は大に怒り必ず戰友の爲に復讐せずんば已まざと思ひけり。同日大山大將諸將參謀を李家屯の

西北に集め明日より旅順總攻撃の軍議を開きしに、此日敵より戦を挑みしかば第一師團兵之に應戦す。希典も此戦争に参加したり。明くれば十月二十一日なり。軍議の如く旅順總攻撃あり希典は椅子山砲臺の北方より毅軍練兵場の方面に突出すべき命を受け同方面に行軍中、途中にて午前八時椅子山の砲臺陥りしかば砲臺より逃れ來りし清兵一千餘人、希典の前路に向て殺到す。希典迎へて之を撃つ。饒頭山の砲臺、しきりに發砲して清兵を助けしかど希典物ともせずして奮戦したりしかば半時間許の間に清兵は逃げ散りたり。希典はそれより毅軍練兵場の敵に當りたり。此日午前八時椅子山の砲臺先づ落ちしより午前十一時には二龍山の砲臺陥り、午後五時には黄金山の砲臺陥り、流石に金城湯池を以て誇りたる東洋の名城も其二十餘砦を擧げて一日の中に我手に落ちたり。然るに復州方面の敵兵は我軍の主力を旅順攻撃に集中し後方の守備稍や薄弱なるを覺りしかば昨日より大兵を以て金州城を圍み同地の形勢甚だ危しとの報ありしかば希典旅順陥落

と共に一息ほつとつきたる間もなく兵を率ゐて金州に急行し同所の守備隊を助くべしとの命を受けたり。今日まで三日の間險を越え、三日の間、敵と戦ひ、疲労既に極まりし時に於て此命に接す、武士の務こそ誠につらきものなりける。されど希典はいざ卿等、是より金州にて兎狩りせんとして、直ちに出兵の用意をなし、一隊の軍馬疾風の沙漠を渡るが如く十里の復州街道を馳せ下り同二十四日午後一時金州に着陣したりけるに幸にも金州の守備隊は寡兵を以て大敵を撃攘し、其日まで無事なりしかば希典は金州城門の外に於て守備隊長に會し其無事を祝したり。是より希典しばらく金州に居る。此に此頃の希典につきてさまざまの物語あり。第一軍の旅順を取りしときは其前に土城子の事ありしかば兵士の中には復讐の念抑へ難かりしものもあり、旅順に入りてよりは少しにても抵抗するものは直ちに殺したるもありしかば、さては日本人は血に渴したる好戦的本能掩ひ難く、虐殺を恣にしたりなど批判する外國人もありしと聞えたり。然るに希典は

始より軍規を嚴肅にし、何處までも仁義を以て敵を待つべしとの説なりしかば、我兵士の取締りも成るべくは十分行届くやうにし、不仁の名を得ざる様にいたしたし、殊に一軍の中心たるべき高級武官に於ては毫末ども、軍規を輕んずるが如き言行あるべからずと苦言痛語したりしとぞ。又金州城陷落の時の事なるべし、諸隊の將校、師團司令部に引上げ來りしに戦利品山の如く營中に集めてあり、中に虎、熊、狐などの皮を付けたる外套あり。將校いづれも善きもの得つ、いざ借りて歸らんとて各競うて其好む所のものを取りてけり。希典にも持ちかへりたまへと云ふに、取る様子もなし。山地中將は磊落なる人なれば「まあ、左様言はずに記念になるもの故、持ち行きたまへ」と勸めぬ。希典も上官の詞なればさらば一枚申受けんとて受取りしが自身の營所に歸る途中にて野戰病院に立寄り、患者にかけ與られよとて病院の役人に渡し、自身は常の如く兵士と同様の外套を着し居たりと云ふ。旅順此頃の氣候は寒暖計、氷點下八度に下り、口鬚は氷

結して氷柱となり、鼻水も流れながら氷り、水筒の水も氷りて飲み難き時もあり、兵站部の握飯は凍結してぼろぼろとなる程なり、左様の寒氣にも兵士の苦勞を思ひて獨り自ら厚き外套を着るに忍びず、且分捕の品にはそれ／＼取扱の規則ありて一旦は國家の所有たるべきものなるに一時の便宜とは云ひながら故なく借り返るは我心に恥づる所なりと思ひしなるべし。之を聞く人昔し希典の師なるける玉木文之進は、長州藩の郡奉行たりしとき百術ありと雖も一清に如かずとて「不如一清」の四字を刻みたる印を用ひし程の廉潔なる人なりしが、希典の廉潔は藍より出で、藍よりも青く其師にも勝れりと歎賞し、又或人は希典が士卒と艱苦を共にせんとするは漢の將軍李廣の風ありと云へり。加之希典は敵の將士に對しても軍人同志の禮儀を守り、金州を守備せし時清兵の捕虜中に中隊長相當のもの、下士相當のものなどありし由を聞き彼等を待つに尋常の兵士を以てすべからずとて各その位置相應の禮儀を以て之を遇せしかば彼等も日本軍人の雅量に感



激したりと云ふ。猛きのメが武士に非ず、かゝるやさしく、しほらしき心ありたればこそ、部下の士卒、皆此人の爲に死なんとぞ思ひける。

日清戦役(四) 希典蓋平城に武名を揚ぐること

希典は其後暫らく金州を準備し居りしが十二月五日に至りて普蘭店支隊司令に任じ同十一日同地に着し、翌明治二十八年正月元日を此に迎へたり。然るに是より先き敵將宋慶優勢なる大軍を以て田庄臺に在り、兵を分ちて蓋平を守り、我第一軍、(時に第一軍の桂中將は海城に在り)と第二軍の中間に介在し、數ば我を惱ませしを以て第二軍は軍司令部に於て議を決し第一師團をして混成旅團を作り、先づ蓋平を衝きて宋慶の左翼を絶ち第一軍の第三師團と連絡を通ぜしむべきことに定めぬ。此命令舊臘三十日を以て第一師團に下りしかば第一師團司令部に於ては更に混成旅團を作るべき部隊に命じ悉く普蘭店に會し希典の指揮の下に進撃せしめたり。是に於て希

典は各部隊の集合するを待ち一月二日凜冽たる朔風を侵して普蘭店を出で、途中に於て屢は敵の候騎を撃攘し、一月九日蓋平に達し、翌日午前五時半を以て開戦し、同九時四十分を以て之を陥れたり。蓋平の清兵は今迄の様なる柔弱のものに非ず、自ら城外三町程の蓋平河岸に出で來り、半月形の掩堡及び復防禦の堡までも築き、是に依りて我を射撃したり。是さへ既に清兵としては異數の事なるに是までの敵の如く遠距離よりあはて、射撃を行ふことなく、我兵の彼の射界に入るを待ち始めて發射し、着弾も頗る正しく、我地に伏して敵弾を避くれば敵は直ちに射撃を止め、我立ては又射撃す。加ふるに蓋平河は結氷して滑り易く、容易に渡るべからず。我左翼前の營口街道よりも敵兵陸續縱隊を作りて襲ひ來りしかば勇猛無雙の日本男兒も此に至りて些か躊躇の色ありしに、希典は馬を陣頭に進め、今の時は唯だ進むあるを知るのみ、いざ人々よ驀地に進んで氷河を踏破し敵陣を突き破れと命令したり。其號令森嚴にして氷よりも冷かに、鐵よりも堅

く、勇氣凛々として傍を拂つて見えたりける。陽氣の發する所金石も亦透る。希典の精神は一道の靈火となりて全軍の心を焚せしかば、此號令を聞くと均しく一同ウーッと喚聲を揚げ、大河の中に飛入りたり。河は一面に凍合して所々凸面の傾斜を爲す。我兵は倒れては起き、起ては倒れ、敵の狙撃を事ともせず忽ち一齊に前岸に達し敵壘に突入し、さしもに精銳を誇る宋慶部下の清兵をして膽落ち、氣沮ましむることを得たり。此蓋平の戦勝に依りて數ば金州を逆襲せんとしたる敵勢を挫き、海州方面の危険を除き、第一、第二軍の連絡を全うすることを得たりしかば、希典を知るものも知らざるものも其大功を賞讃し武名は愈よ高かりける。

(一五) 遼東還附、希典臺灣出陣の事

春とはいへど

梅咲かず

わづかに青き

垂楊の下に  
霜枯れの  
希典此所に  
雲井まで  
中將にまで  
膽勇に  
清國遂に  
土地を割き  
帝國の武威  
思ひきや

里もまれなる  
雪積みて  
寂しさに猶ほ  
在陣し  
聞えてければ  
昇進す。  
自尊の夢の  
悔悟して  
此に平和の  
揚りける  
歐州無雙の

滿洲は  
我日本の  
まさりけり。  
勇名高く  
此春は  
大和男兒の  
破れたる  
金を償ひ  
約成りて  
四月の末に  
強兵と

武名の高き  
我物と  
先づ手をつけし  
ありければ  
語ひ合ひて  
名を假りて  
我軍人が  
遼東を  
支那に返せと  
恐れざる  
心はたけし

大國は  
兼て思ひし  
人ありと  
他の大國を  
表面には  
裏面に野心を  
血を染めて  
再びもとの  
迫りけり。  
我が日本の  
昔より

その昔より  
滿洲に  
ねたむ心の  
二つまで  
東洋平和に  
おしかくし  
我ものとせし  
主人なる  
正義を履みて  
武士の  
傳へ來りし

日本刀  
菟の毛の末の  
八隅知し  
風收まりて  
かへりたる  
あらしの立ちて  
思召し  
枉げて許させ  
空しくて  
領土を  
憤り、

氷に似たる  
塵ほども  
我大君は  
浪立たず  
亞細亞の海に  
人草の  
かの三國の  
たまひけり。  
新に得たる  
人に奪はれし  
思ひやるだに

其双  
錆びざりけれど  
その爲に  
もとの平和に  
再びよ、  
なやまんことを  
干涉を  
百戰の功  
帝國の  
武士の心の  
あはれなり。

臺灣島は

かたみとて

いとしきものに

頑民の

彈丸黒子の

戦ひぬ。

守備してありし

かしこみて

大連灣を

夏よりも

汗をふるひて

新領土

此戦役の

ものなれば

昔を戀ふ

やさしくも

王師を迎へ

遼東を

大君のみこと

空清き

我故郷の

基隆に

されば南の

唯一つ、

僅に残る

思ひしに

竿を掲げて

地に據りて

此時までも

希典は

風涼かに

船出しつ、

あつさはげしき

上陸し

其翌年の

陸奥の

武名いよく

鎮定の功

春深き

青葉ヶ岡に

高かりき。

なし終へて

彌生の頃に

凱旋し

日清戦役(五) 希典太平山に戦ひしより、  
金州方面守備隊司令官たりしこと。

希典は明治二十八年正月十日蓋平城を陥れ敵の勇將宋慶の膽を破りしより  
四十餘日の間は蓋平に在陣したり。此間に二月十二日、山東省の威海衛に  
於ては清國水師提督丁汝昌、降を請ひて自殺し、港内の軍艦其外悉く我有  
に歸したり。第一師團長山地中將は此時金州に居りたるが蓋平の大敗以來  
營口方面に通去りし敵兵を追撃し、遼河の咽喉たる營口を占領して北清の